聖徒の道 1975年11月20日発行（毎月1回20日発行） 第19巻第11号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可

聖徒の道 11 1975

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

ロバート・D・ヘイルズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ドイル・L・グリーン
（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー
ロジャー・ギリング（デザイナー）

日本語コーディネーター

八木沼　修一

1975年 **11月号**

もくじ

今の世の人々に悔改めを叫ばんために …… 497
地域総大会報告…… 499
東洋の真珠，香港…… 505
険しい頂とそびえ立つ信仰，台湾 …… 507
日本のお友だち…… 509
フィリピンのお友だち…… 510
香港のお友だち…… 511
韓国のお友だち…… 512
台湾のお友だち…… 513
お母さんはよいむすこをもちました…… 514
おもちゃばこ…… 515
日本，日出づる国の福音の光…… 517
東洋の不死鳥，韓国…… 521
バヤニハンの島，フィリピン…… 524
ローカル・ニュース…… 526

聖徒の道 11月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約 1,700円　1部 150円
海外予約 2,200円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

◇今月の表紙◇

香港の夜景

P.505

P.507

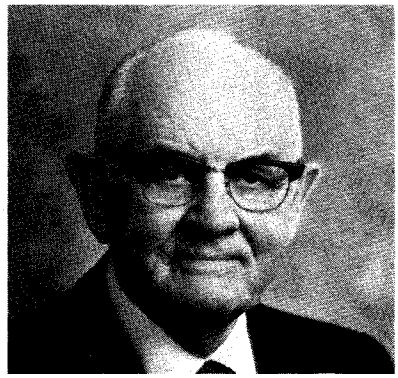
P.517

P.521

P.524

大管長会メッセージ　1975年4月6日(日) 第145回年次総大会における説教

今の世の人々に悔改めを叫ばんために



大管長
スペンサー・W・キンボール

私たちは今日の俗悪放蕩の中に、ソドム、ゴモラ、そしてバビロンの再現を見る。

愛する兄弟姉妹の皆さん。間もなくこの年次総大会もその幕を閉じようとしている。あなた方もこの大会から多くのものを得たことであろう。そう願っている。

この大会で、大勢の人々が麗しい証と力強い説教を述べた。また、数百万になんなんとする聴衆が清い心と寛容な気持をもって、これらの言葉に耳を傾けてこられたものと思う。私たちは、その中から大勢の人々が、現在数百万の会員を擁するこの偉大な教会に加わることを望まれるものと期待している。

私たちはこの福音が真実であることを知っており、全世界の人々にこのことを証している。そして、人々が過去の偏見や誤解をすべて拭い去って、イエス・キリストの羊の群れに加わるよう、私たちは願っている。汚れなく、純粋な福音は、この教会にこそあるからである。

この大会中、幹部の兄弟たちはいろいろなテーマで話をしたが、それらはすべて、イエス・キリストの福音の原則に則ったものであった。

数日前の記者会見において、次のような質問を受けた。「今日の社会で、あなたが最も憂慮しておられることは何ですか」と。私はその記者会見ですでに取り上げられていた教会の発展に伴う問題をあげようと思った。なぜなら、現在教会は著しい発展を続けており、民を導く指導者を育てることにやや困難をおぼえているからである。しかし喜ばしいことに、私たちは前進を続けている。

私はこのことを即座に心の中に思いめぐらし、先の質問に答えようとしたとき、アッシリアとバビロニアが世に権力をふるった時代のことが心に浮かんできた。私は今、昨夜の神権会でロムニー副管長が語った、旧約聖書のベルシャザルの物語を思い起こしている。彼は、バビロンがキュロス（クロス）大王に征服される前に大きな勢力を奮った最後の王で、あの名高いネブカデネザルの息子であり、後継者であった。私たちは、エルサレムにある聖なるソロモンの神殿を汚し、その神殿から多数の高価な品々を運び去った、ネブカデネザルの不敵な略奪行為のことも思い起こした。

ベルシャザル王は大臣1千人と盛大な酒宴を催し、彼らと共に酒を飲んでいた。1千人分の食事を用意することは、容易なことではない。

ベルシャザルは、主の目的のためにすでに献堂されていた聖なる神殿から彼の父が略奪してきた金銀の器をただながめるだけでは飽き足らず、それで酒をくみかわしたのであった。彼は1千人の大臣だけでなく、王子や妻やそばめをも宮殿に招いたのである。彼に招かれた者たちは、飲み食いし、金、銀、青銅、鉄、木、石などの神々のために乾杯したものと思われる。（ダニエル5：1－4参照）

今日の世の中の様子、特にその放縦に満ちた様を思いめぐらし、私は歴史は繰り返すのではないだろうかと思うようになった。今日の新聞や雑誌を読むと、ふたつの時代の間に極めて著しい類似点があるように思われる。多くの場所で、社会の指導者と仰がれるおびただしい数の人々が盛大な酒宴を設けている。実業家やその妻、めかけたちも同様である。彼らは酒に酔いしれ、放縦な生活を送り、不道徳に走り、不貞を働いている。これらの記事を読むにつけ、私は「歴史は繰り返す」とつぶやかざるを得ないのである。

私は現代の世の道徳について、いやになるほど多くのことを語ってきた。しかし、主は教義と聖約の中でこう言っておられる。「汝ら今の代の人々に向いて、悔改めのほか何事をも語るべからず。わが誡命を守りまたわが誡命に従いてわが業を起すを助けよ。」（教義と聖約6：9）

また言っておられる。「悔い改むる人を見て彼の悦びは如何に大いなるか。

これを以て、汝らは今の世の人々に悔改めを叫ばんために召さるるなり。」（教義と聖約18：13，14）

初期の聖徒たちがミズーリ州に向かっていたときに、次のような主のみ言葉がその指導者たちに下された。

「彼らは行く行く教えを説きて至る所に真理の証をなし、富める者、位高き者、卑しき者、貧しき者を訪いて悔改めを為さしむべし。

世に住む民悔い改むる心あらば、彼らに教会を建てさせよ。」（教義と聖約58：47，48）

そのように、今は悔改めの時代であると思う。人々が自らの状態をふり返り、本来の姿にその生活を変える時代

である。

かつて主がシモン・ペテロに直接に戒めを与えられたように、今日の指導者にも戒めが下されている。「この故にわれ汝らに一つの誡命を与う。汝らこの民の中に行き、その名をペテロと言いし古えのわが使徒が言いし如くこの民に言うべし。」(教義と聖約49：11)私は、ペテロが人々にその生活を清くし、罪を悔い改めるよう絶えず呼びかけていたことを知っている。

ペテロは言っている。「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。

異邦人の中にあって、りっぱな行ないをしなさい。そうすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのりっぱなわざを見て、かえって、おとずれの日に神をあがめるようになろう。」(Ⅰペテロ2：11，12)

未婚の男女が肉体関係を持つことも今日の世では普通になっていると聞く。彼らは、結婚などもはや必要ないと、いつも声を大にして主張している。結婚することなしに一緒に暮らし、肉体関係を結ぶことに対し、彼らはほとんど何の恥じらいも感じていないのである。神がその律法を変えられたのであろうか。それとも、弱く、あてにならない、横柄な人間が勇気を賭して神に挑み、神の律法を変えたとでも言うのだろうか。罪は過去にのみ存在したものだろうか。悪魔ははるかな昔にのみ、人々の心を支配したのだろうか。

アブラハムは、ソドムやゴモラ、その他の低地の町々が邪悪であったことを知っていた。カインが語ったように「わが知るべき主とは何人なりや」(モーセ5：16)と言う、邪悪で、神を信じない者たちがそこに住んでいたのであった。アブラハムは、それらの町の滅ぼされる日が近づいたのを知ったとき、彼らをあわれに思い、「五十人の正しい者のために」他の者たちを助けて下さいと主に請い願った。(創世18：24参照)　アブラハムはさらに請い続け、45名の正しい人がいたら助けて下さるように、40名、30名、20名、さては10名の正しい人のために助けて下さるようにと願ったのであった。しかしそれらの悪徳の町には、10名の正しい人さえ見出せないことは明らかだった。(創世18：24－32参照)

悪は続き、罪人らは頑として変わらなかった。彼らは滅びが下されようとしていることを警告されながらもそれを笑い、あざけった。そして、ソドムの名を広く知らしめた罪深い行為は絶えて止まなかった。事実、町の住民たちは、清い御使いたちが町に来たのを見て、御使いたちを陥れようと考えた。罪深い男たちは御使いたちの泊まっていた家に押しかけ、その入口を打ち破ろうとしたのである。(創世19：4－11参照)

アブラハムは、その町を救うために、彼がなし得るすべてのことを行なった。しかし民の堕落と放縦ははなはだしく、それを救うことは不可能であった。

「主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。」(創世19：24，25)

歴史は繰り返すということを、私たちは目の当たりにしている。ポルノグラフィー、姦淫、同性愛が横行し、自由奔放な生活をする人が増してきたのを見ると、サタンの時代が戻り、歴史は繰り返されているように思えるのである。

今日の社会に住む非常に多くの人々が、品のない姿で、汚らわしい言葉を使い、奇行に走り、堕落しているのを見ると、サタンはその邪悪な手を伸ばして、この地上の民を彼の軍勢に引き入れてしまったのだろうかとさえ思う。私たちの世界を脅かしている悪を追い払うに足るだけの正しい人々はいないのだろうか。人々はなぜ悪に妥協し、罪を黙認し続けるのだろうか。

最近私は、ふとした機会に、6代前の大管長会の声明を見出した。私は今、その声明文から多くの箇所を読んでもらいたいと思っている。なぜなら、神が昨日も今日も明日も、永遠にわたって同じ神であることをその声明から思い起こせるからである。神が昔の予言者たちと、救い主の時代の予言者たち、現代の予言者たちに与えられた戒めから、私たちは、神が昨日も今日も、永遠にわたって同じ神であることを十分に理解できるのである。

私たちは、人間が状況に即座に左右されてしまう存在であるとは信じない。現代は過去の時代と異なり、人々の知性は優れ、現代は過去の時代に取って代わったのだと考える人々がいるが、私たちはそれには承服しかねる。主は、過去に下された言葉をいつまでも守り続けられるであろう。そして、自分自身と伴侶と家族を敬い、正しい生活を送るよう人に期待をかけられるのである。主はこのことを過去に何千回となく繰り返し述べてこられた。

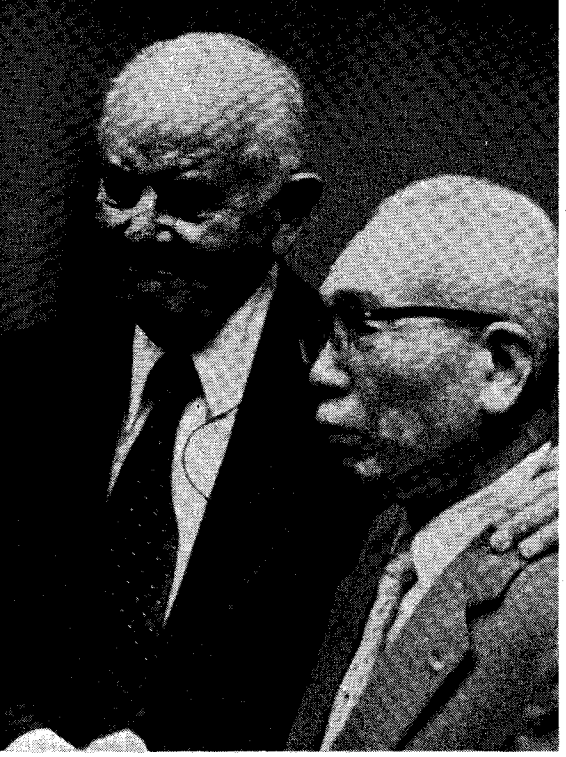
記者の方々に話しながら、そのことが私の心に浮かんできたのであった。私たちは現在行なっていないどのようなことを行なえるだろうか。どこまで行なえるだろうか。この世において正義を守り続けるために、何を変えればよいだろうか。もしもこれを行なわなければ、バビロニア人や、幾分方法は異なるがソドムとゴモラ、その他の町々に下されたと同じ滅びが下されるように思えるからである。

私たちはこのことを非常に強く感じている。私たちが福音を宣べ伝えている理由はここにある。この理由で私たちは子供たちに警告を与え、彼らを教え、青少年にも警告を与えている。また、すでに結婚している人々に、その結婚を美しく清い状態に保つよう警告しているのもこの理由による。

兄弟姉妹、この大会を終えるにあたって申し上げたいことがある。高い霊性をもってそれぞれの家に戻り、教会幹部の話から得た証と、心に受けた深い感動とを、家族や友人、ワード部、ステーキ部、支部の会員に伝えていただきたい。

この話を終えるにあたって証を述べたい。私は神が生きておられることを知っている。イエス・キリストは生きておられる。主は私たちを愛し、私たちに霊感を下し、私たちを導いておられる。主は私たちを愛しておられる。主は愛や悲しみの感情を持っておられる御方である。私たちが主のはっきり示された、まっすぐな道からそれると、主は非常に悲しまれるのである。

この証を主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



地域総大会報告

ラリー・ヒラー

この8月、日本、フィリピン、香港、台湾、韓国の教会員のために地域総大会が開かれた。日程は日本：8月8日—10日、フィリピン：11日—12日、香港・台湾：13日—14日、韓国：15日—17日である。各大会とも数千から数万名に及ぶ教会員、求道者が集い、キンボール大管長ならびに随行の教会幹部から教示を受けた。

ある者は13時間も立ち通しで夜汽車に揺られ、またある者は2日も船に乗って大会の会場にやって来た。中には1,600キロもの道のりを6日間もかかって、船とバスを乗り継いで来た者もいた。

盲目の人がいた。聾唖者がいた。車椅子を操る人もいた。そして麻痺した体をも省みず、友人に支えられながら会場に入る人さえ見受けられた。

裕福な商人もいれば貧しい農夫もいる。教会員となって60年にもなる人もいればつい2、3日前にバプテスマを受けた人もいた。

日本語、英語、中国語、そして朝鮮語を話す人々が、東京、マニラ、香港、台北、ソウルへと集まったのである。

確かに、話す言語は異なっていた。しかし、たったひとつ共通のものがあった。それは、霊の糧を得るためにこの大会に集ったということである。彼らは主により油灌がれた僕、特に主の予言者スペンサー・W・キンボール大管長の声を聞くために大会に来た。

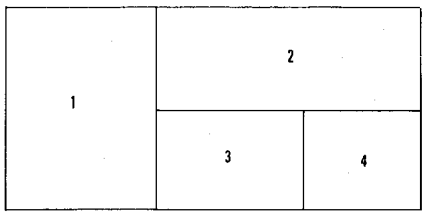
キンボール大管長と随行の教会幹部が2週間足らずの内に旅した道のりは25,600キロに達する。教会幹部の説教

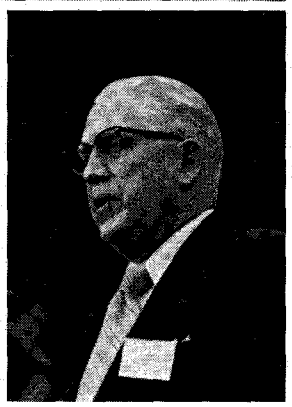
1．キンボール大管長。1915年にバプテスマを受けた日本人教会員、奈良富士哉兄弟と共に

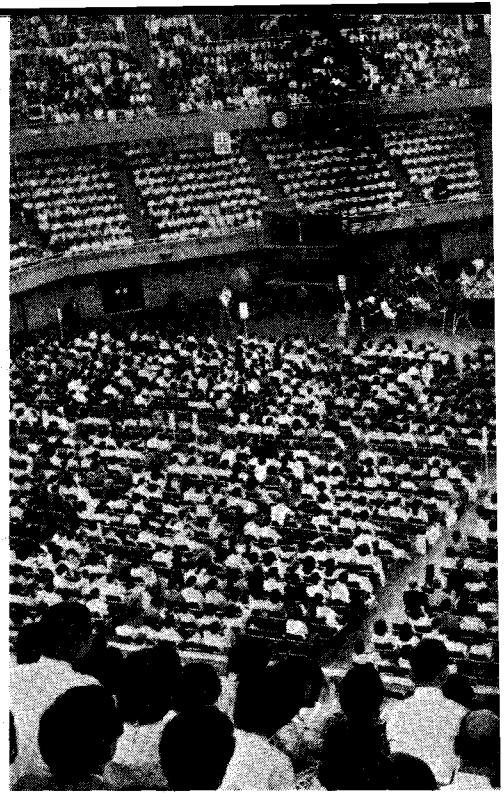
2．香港で話されるロムニー副管長

3．台湾の聖歌隊

4．教会幹部を助ける通訳者たち







5．香港の青年コーラス

6．マニラの教会員に語る小松長老

7．シル長老（日本）

8．全身全霊を一本の指揮棒に託して

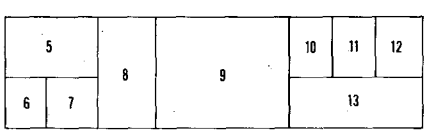
9．日本の大会に集った大群衆

10．教会員は天父の家族の一員であることを語るピーターソン長老（香港）

11．教会幹部のメッセージは、同時通訳により自国語で伝えられた

12．人生が価値ある旅であることを日本の聖徒に語るポール・H・ダン長老

13．空港での出迎え



は合わせて91あったが、キンボール大管長はその内14の説教を行ない、その他記者会見や特別集会での話を含めると、その量は驚くばかりである。

キンボール大管長に随行したのは、マリオン・G・ロムニー第二副管長、エズラ・タフト・ベンソン十二使徒評議員会会長、十二使徒評議員会からゴードン・B・ヒンクレー、マービン・J・アシュトンの両長老、十二使徒評議員会補助からはスターリング・W・シル、ジェームス・A・カリモア、O・レスリー・ストーン、J・トーマス・ファイアンズ、アドニー・Y・小松の各長老、七十人最高評議員会会長のポール・H・ダン長老、管理監督会のH・バーク・ピーターソン第一副監督、さらには大管長会特別顧問のデビッド・M・ケネディー、バーバラ・B・スミス扶助協会中央管理会会長である。

日本および韓国の大会はこれまでの地域総大会と同じ形式を踏んで行なわれた。すなわち金曜の夜は各ステーキ部，伝道部が繰り出す民踊の数々。土曜、日曜は通常の大会セッションが2回ずつ、さらに土曜の夜は、既婚者と26歳以上の独身者のために両親の夕べ、25歳以下の独身者を対象として若人の夕べが催された。また神権指導者のための集会が日曜の早朝に行なわれた。

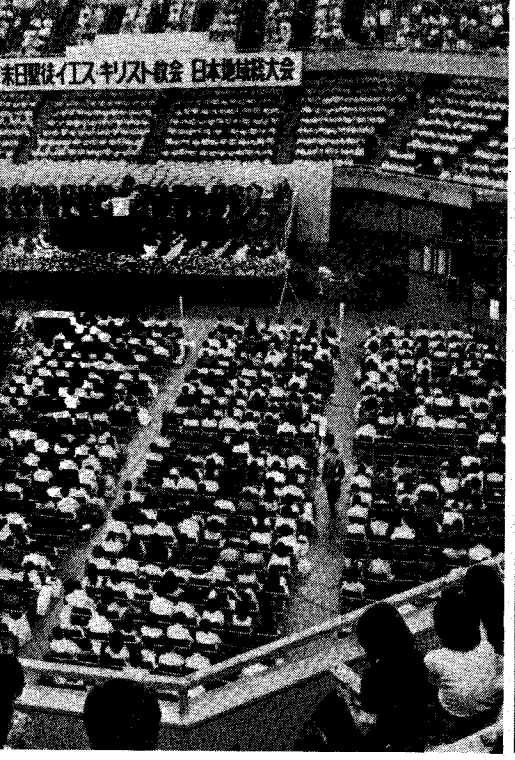
今回のアジアの地域総大会と過去に開かれたものとが異なるのは、東京大会とソウル大会の中間に小規模ながらさらに3つの地域総大会が開かれたことである。

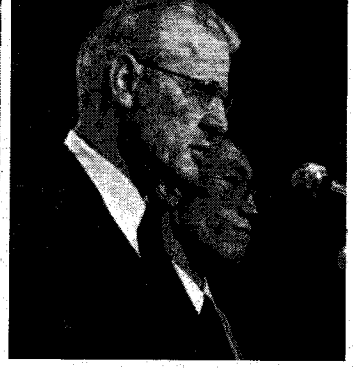
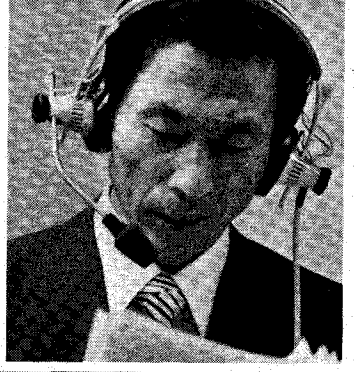
その口火を切ったのがフィリピンである。フィリピンでは月曜の夜1時間を文化活動に、その後の1時間ならびに火曜の午後と夜に通常のセッションが持たれた。

香港と台湾の大会は教会幹部を2グループに分け、同時に開催された。会は水曜および木曜の夜開かれたが、大管長は最初香港の大会を管理した後、木曜の朝台北へ飛び、台湾の第2日目の会を管理した。逆にロムニー副管長は第1日目は台湾、2日目は香港の大会を管理した。

恐らくこれらの大会で最も重要な出来事は、大管長による東京神殿建設の発表であろう。この発表は8月8日、土曜日、東京での最初のセッションの冒頭で行なわれた。

会場に集まった人々にとってこの発表はあまりにも重大で、また胸を打つものであったのだろう。発表がなされたその瞬間、人々は耳を疑った。しかし与えられようとしている祝福の大きさに気づくにつれ、ある者は満面に喜びの笑みをたたえ、またある者は思わ



ず目がしらを押えた。そして、あふれ出る喜びと感動は、全会衆の盛大な拍手となって表われたのである。まるで、こみあげてくる喜びと感謝の気持を、ほかに表わすすべがないかのように。圧巻であった。

この発表を聞いた人々の中に奈良富士哉兄弟、熊谷たまの姉妹の姿があった。奈良兄弟は1915年、熊谷姉妹は1908年以来の教会員である。奈良兄弟は神殿建設の発表を聞くや喜びを顔一杯に表わし、支持の挙手が求められる前からもう手を挙げていた。彼は感動の胸の内をこう語る。「このような素晴らしい場に同席できることは、本当に大きな特権だと思います。」彼の心には、神殿建設予定地に現在建っている日本東京伝道本部の建物の献堂式の様子が浮かんでいた。そのときマシュー・カウリー長老は、日本の地に神殿の建つ日が来ることを予言したのであった。

熊谷姉妹はこの発表にただ驚くばかりだったという。言葉には言い表わせない並々ならぬ感動が、彼女の胸にはあふれていた。彼女の今の望みは、新しい神殿が献堂される様子をその目で見ることである。

日本の地域総大会に集まった人々は大部分が最近改宗した人であり、奈良兄弟や熊谷姉妹のように教会歴の長い人はごくまれである。しかし、そのような比較的新しい人々も、この神殿建設の発表を長い間待ち望んでいた。と言うのは、ハワイ神殿まで行くには多額の金がかかり、貯えるにも相当の年月を必要とするからである。だが今や彼らは、生活を切り詰め、犠牲を捧げることにより、望むときにいつでも参入できる自分たちの神殿を建てることができる。そして永遠の家族という単位に共に結び固められるのである。彼らの目が感激のあまりうるんでいたのも当然のことであろう。

もちろん神殿が建設されるのは日本の地だが、恩恵にあずかるのは全アジアの教会員である。従ってどの会場においても、神殿のニュースは熱狂的に受け入れられた。また、時機到来すればアジアの他の地にも神殿が建つという予言者の約束に人々は喜びを表わしたのである。

確かに大会に参加した人々の心は神殿建設の発表によって高められたが、教会幹部によるみたまに満ちた説教は、どれひとつとってみても人々を高揚しないものはなかった。多くの人々にとって、大会に参加することは並大抵なことではなかった。遠距離の旅行、赤ん坊や子供の世話、旅費や宿泊費を捻出するための残業やアルバイトなどである。また、教会員でない両親を説得して大会参加の許可を得なければならない若人も少なくなかった。

しかしこれらの困難にもかかわらず、人々はそれを犠牲だとは言いたがらない。ある者はこう言う。「犠牲でも何でもありませんでした。大会の発表があってからずっと祈りと準備を続けてきましたからね。」

大会に強いみたまの導きがあったひとつの理由は、多くの教会員が霊的な準備をしていたことにある。「私と妻は、大会の準備のためにだいぶ前から一緒に祈り、断食をし、聖典を勉強してきました。」ある人はそう語ってくれた。

さらに、大会前の数カ月間、教会出席、ホームティーチング、什分の一や献金の支払いなどが向上したと報告してきた神権指導者も幾人かいた。今まで伝道となると尻込みしていた人たちも、教会のことや大会のことについて友人知人に話し始めたとのことである。

このような霊的、個人的備えに加えて、大会を成功裡に導くためにかなりの物質的備えが必要であった。適切な会場の選択と準備、通訳の選出と訓練、音響装置の設置、聖歌隊や文化活動参加者の編成や訓練、遠隔地から大会に集う人のための宿泊あっせん、宣伝等、挙げればきりがない。そしてそのひと

つひとつには、大会を円滑に運営するために検討しなければならない項目が山ほどあったのである。

この準備のために、地元の聖徒たちは長時間、懸命に働いた。あるステーキ部長によれば、準備の仕事や文化活動への参加に対して申込みがあまりにも多く、全員に仕事を割り当てるのに少々苦労したとのことである。

教会員のこうした働きは、大会の準備のみにとどまらなかった。彼らは自ら進んで互いに助け合ったのである。会場近辺に住んでいる人は交通費や宿泊費を必要としない。そこで彼らは遠くから来る人々の宿泊のために家を提供し、食事を作り、案内役を買って出た。また地元出身の宣教師が大会に参加できるように献金した人々もいた。

人々は異口同音に言う。「準備をしたかいがありました。」大会は各国の聖徒にとって、正に霊的経験の大いなる集大成だったのである。会場にあふれんばかりの仲間と共に味わう暖かいみたまの導き、そこから生まれたものは一致であった。中でも聖歌隊や文化活動に参加した人々の一致、兄弟愛には目を見張るものがあった。

各大会とも聖歌隊は圧巻であったと言えよう。その歌声は美しく、熱意にあふれたものであった。各ユニットからの混成聖歌隊とはとても思えない。まるで何年も共に歌ってきたかのような見事さである。

聖歌隊で歌ったある若者はこう語った。「讃美歌は数え切れないほど歌いましたが、あんなに歌えたのは初めてです。僕自身の声もみんなの声も普段と全く違っていました。聖歌隊に参加しただけでも霊的な経験をすることができたと思っています。」

活動の夕べでの歌や踊り、ドラマも見事であった。準備には献身的な努力が払われたのであろう。グループが準備を始めたのは数カ月前からであった。ある国では、数週間にわたる練習の後大会開始1週間前に会場入りし、6日の間、日に最低9時間もの練習を積んだとのことである。練習は外で行なわれたが、彼らは雨が降っても踊りの手を休めなかった。

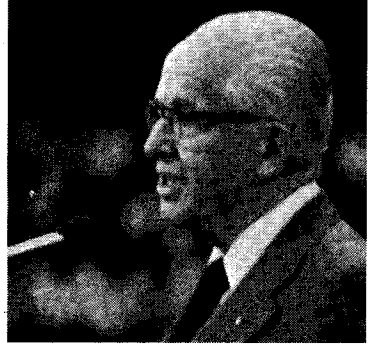
練習の合間の食事と休息の時間は友情を育む時間でもある。そしてこの友情の輪はワード部や支部、地方部、ステーキ部、伝道部の壁を越えて次第に大きくなっていった。やがてロマンスが芽生え、中には将来を誓い合うカップルも生まれた。また大会を終えてからもダンスや歌を続けていこうと決心した人たちもいる。

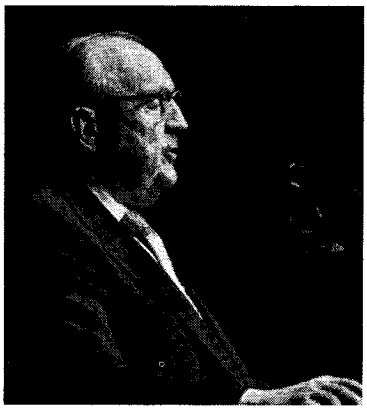
もちろんこの大会にあって最も重要な事柄と言えば、出席した人々が受けた影響であろう。アジアでの地域総大会を終えて、どれだけの人の生活が変わっただろうか。それは測り知れない。人々は大会から力を受け、さらに義しい生活をしよう、伝道に出ようと決心したに違いない。そしてその変化は教会員でない友人や家族、親戚の人生に影響を与え、教会は以前よりも増して急速に発展していくであろう。事実、大会には求道者の姿が数多く見受けられた。フィリピンのある支部長は、大会に250名もの人々を招待できたという。そしてその中の120名が求道者であった。

この大会から特に力を受けたのは若人であった。大会の終りにある若人はこう話してくれた。「たくさんのことを学びました。まず、人生の目標を決めなければならないということです。また、清い生活をし、純潔の律法を守ること、聖典を研究し祈ることです。私は伝道に出る決心をしました。」

こう語った人もいた。「私は今まで支部や地方部の大会に何度も出席してきました。でもこれだけ多くの人が同じ証を持って集まっているのを見て、教会に対するイメージがさらに大きくなった感じです。」

ある少女は語る。「予言者が来られ





たのは祝福だと思います。予言者や教会幹部のおっしゃることを聞いて、これからも続けて主の道を歩んでいこうという勇気と信仰が湧いてきました。」

「私は予言者の顔を見ただけで証が強まりました。予言者の声を聞いていると、今まで覚えていた聖句がみな新鮮によみがえってくるのです。」そう語る人もいた。

ある若者はこう述べた。「伝道に出ようという望みがますます強まりました。大管長の話で一番印象に残ったのは純潔を守るということです。私は一生懸命自分自身を清く保ち、戒めもすべて守りたいと思います。」

そして、ある父親が語ってくれた次の言葉こそ、大会を終えたときの全会員の胸の内を端的に表わしているのではないだろうか。「教会幹部の素晴らしい話を聞いて、私たちは心の中に何とも言えない暖かい思いが湧き上がるのを覚えました。会員も求道者も、みなみたまを感じたのです。これから私たちは、その思いを実践に移さなければなりません。」

アジアにおける教会の将来は確かに明るいと言える。聖徒たちは霊的な備えをし、みたまの励ましを受けようと大会に臨んだからである。彼らは報いを受けた。証は強められた。そして必ずや彼らは、得た証をそれぞれの国の同胞に分かち与えるに違いない。そうするときに教会の発展は早まり、会員数は増え、霊性と信仰は高められるのである。

◇　　◇

福音に国籍はありません。全世界の人々はすべて神の息子であり、娘なのです。皆、私たちの兄弟姉妹です。主イエス・キリストが下された大切な戒めを私たちは果たしたいと心から望んでいるのです。主は11人の使徒だけにおっしゃったのではありません。皆様にも、私にもおっしゃったのです。そしてこれは、軽々しく扱う類の言葉ではなく、はっきりとした戒めなのです。

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」（マルコ16：15）　全世界のすべての男女に宣べ伝えよということです。

皆様のお子さんが、福音に忠実で気高く成長なさいますように、皆様の心に平安がありますように。皆様がこの業が神のみ業であるという証を得て、さらにこの大いなる業にまい進なさいますように。

大管長
スペンサー・W・キンボール
日本大会　日曜日午後の部

14. 韓国の聖歌隊

15. 台湾の聖歌隊

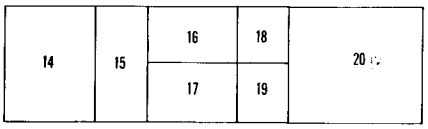
16. 韓国の人気ポピュラーコーラスグループ「テンダーアップルズ」、幹部到着に花を添える

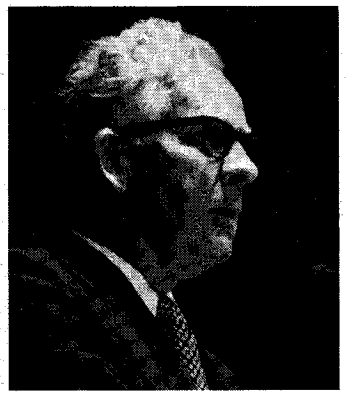
17. 台湾の聖歌隊指揮者

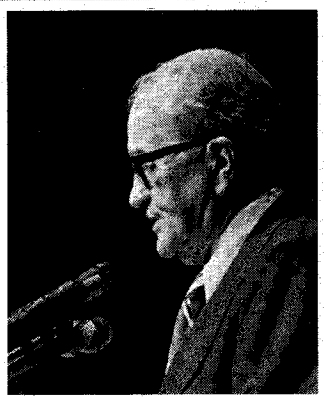
18. 日本の聖徒に勧告を与えるベンソン十二使徒評議員会会長

19. カリモア長老（マニラ）

20. 豊かな色彩の活動の夕べ（韓国）







家庭は堅固な礎であり、文化の柱石です。いかなる国家といえども、家庭を差し置いて国家だけが偉大になるということは決してありません。教会も学校も国家も、弱く堕落した家庭を前にしては、なすすべがないのです。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない」とデビッド・O・マッケイ大管長は言われました。両親の義務は、お互いに助け合い、また子供たちにとって良い助け手となることです。それから隣人、地域、国、そして全世界という順序で義務は広がっていくのです。

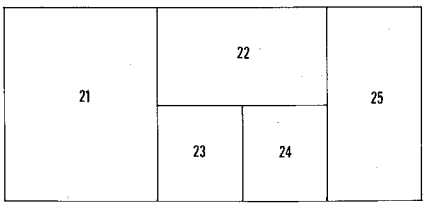
十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン
台湾大会　水曜日夜の部

私はあなた方の多くがこの福音のために両親や兄弟姉妹のもとを離れ、友人や仲間のもとを去り、仕事や教育の機会を断念したことを知っています。あなた方は友人の嘲笑に耐え、主の祭壇に喜んで犠牲を捧げてこられました。あなた方は立派な末日聖徒です。神の真の教会の会員としてふさわしい方々です。あなた方には聖きみたまを伴侶とする資格があり、またこのまま忠実な生活を送るならば、いつの日か主を伴侶とするにふさわしい人物となることができるでしょう。愛する兄弟姉妹、あなた方の信仰と忠実さを主が祝福したもうように。

十二使徒評議員会会員
ゴードン・B・ヒンクレー
香港大会　水曜日夜の部

私は伝道に出ることを考え、その準備をしている方々、またまだ決心をしていない方々にも、私が教会幹部として伝道の業に従事している聖徒たちと接して得た素晴らしい経験を聞いていただきたいと思います。私たちは管理監督会にあって多くの偉大な経験をします。しかし各伝道部を訪れ、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために自分の時間を捧げている兄弟姉妹と接することほど私を喜ばせ、また霊的に高めてくれることはほかにありません。私はこの地上にあってだれにも与えられないような福音が、宣教師たちに与えられるのを見てきました。宣教師は主の目から見て特別な人ですから、主は他の子供たちには得られない特別な物を宣教師のために用意しておられます。美しい宣教師は、ほかの人が得られないような権威と権能と祝福を受けます。主の業の中で最も心が躍るものそれは宣教師になることなのです。

管理監督会第一副監督
H・バーク・ピーターソン
韓国大会　土曜日の若人の夕べにおいて



21. 行く先々で愛を示されるキンボール大管長

22. 香港の聖歌隊

23. アシュトン長老（マニラ）

24. バートン長老（マニラ）

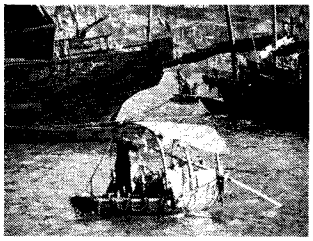
25. 両親の夕べで話すバーバラ・スミス扶助協会中央管理会会長

東洋の真珠

香港

中国大陸は、火を吹く巨大な竜が東を向いているような格好で、周辺の小さな国々に影を投げながら東洋を見おろしている。中華人民共和国の南シナ海寄りをふちどる形のそのひとつが、英国の直轄植民地、香港である。香港は「東洋の真珠」として知られている。この植民地は香港島を中心に230以上の島々から成り、面積は合わせてわずか640平方キロである。

この地域は広さこそないが、主のぶどう園の中に重要な位置を示めている。



香港には過去3回、伝道が行なわれた。1回目は1853年にホセア・スタウト、ジェームズ・ルイス、チャップマン・ダンカンの3名が召されて合衆国から中国に向かったときである。彼らは希望にあふれ、福音を分かつ機会を感謝した。しかしその希望は、数週の後に香港に到着してみごとに打ち砕かれた。「私たちは暖かい歓迎を受けなかった」とルイスは記している。また、「他の教会の宣教師たちは私たちに対する敵がい心をあおった」ともある。

この島で開かれた最初の街頭集会は盛況だったが、他のキリスト教会の妨害ですぐにだれも出席しなくなり、その後3回同じ集会が開かれたが、出席者はゼロであった。スタウト長老はまだ自分の召しに忠実だったが、今は改宗しそうな人は中国にはひとりもいないと信じて、次のように書いている。「私たちは、この地で神と人から望まれることはすべてをし尽くしたと思う。この地での仕事は中止だと判断した。」

落胆した3人の宣教師は、到着後4ヵ月ほどで香港をあとにした。バプテスマはもちろんのこと、福音に興味を持つ人はひとりもいなかった。ジェームズ・ルイスは巨額の借金をして帰宅

した。彼は自分の伝道を「人生の一大苦難」と呼んだ。ホセア・スタウトは、帰宅するとすぐ妻に死なれ、まだ新しい家は人手にわたり、親戚は引越してしまっていた。そのように一見無意味な犠牲のようであったにもかかわらず、ホセア・スタウトは次のように記している。「私たちの伝道が将来良い結果を見るだろうということに、私たちは満足を感じている。この民とこの土地について知識を得たが、こうでなくてはその知識は決して得られなかったのだ。」

主の時刻表では、香港の人々はまだ福音を受け入れる用意ができていなかったのである。そうして67年が過ぎ、2度目の伝道の試みがなされた。今度は十二使徒評議員会のデビッド・O・マッケイ長老と同僚のヒュー・J・キャノンが世界旅行の途中に立ち寄ったのである。彼らは数週間の旅の後、日本、韓国、満州を経て北京に着いた。1921年1月9日日曜日の朝、マッケイ長老は皇帝の居城であった「紫禁城」の中のキプロスの庭で奉献の祈りを捧げた。

しかし伝道がようやく始まったのはそれから28年後であった。マシュー・カウリー長老が香港を訪れた結果、宣教師が送られたのである。1947年7月14日の出来事が、その年のうちに開かれた大会でのカウリー長老の話の中に記録されている。彼はこのように述べた。「私たちはひとりずつ順番に祈る簡易な礼拝によって、この伝道部を正式に開設した。私はヘンリー・アキ兄弟の祈りを忘れることができない。彼はそこに立って4億6千5百万の人口を持つ自分の故国に向かい、自分が民族に救いをもたらす器となれるように、神に切々と訴えた。兄弟姉妹、何という対照であろうか。4億6千5百万民族の中のたったひとりの神権者である。自分に課せられた荷を感じてあの愛する中国人の兄弟が神に民の救いを嘆願したあのときほど、神の神権の尊さに心を動かされたことはなかった。」

日本とハワイで伝道部長をつとめた経験のあるヒルトン・A・ロバートソンの管理下で、伝道部が確立した。2度目の福音伝道の試みは、前回よりも熱意をもって迎えられ、数名のバプテスマが行なわれた。しかし朝鮮戦争と中国革命のためにまたも1950年、香港伝道部は閉鎖された。この閉鎖に伴い、宣教師は大勢の関心ある求道者を残して帰国した。

3回目の伝道は1955年に始まった。当時H・グラント・ヒートン伝道部長は、「私たちが教会に導くことのできる改宗者の数に限界を設ける唯一のものは、彼らにどれだけ正しく接することができるかという私たちの能力なのだ」と書いている。新しい改宗者は熱心な宣教師となった。ある兄弟はバプテスマを受けてから、新たに発見した真理に非常に感銘し、大勢の友人や親戚をグループに分け、宣教師を呼んで教えてもらった。

やってきた宣教師は、彼らが福音を知るためにではなく、教会員となるにはどうすればよいかを聞くために出席したことを知って、うれしい驚きを覚えた。福音を紹介した兄弟から強い証を聞いて、すでに心に聖霊の証を受けていたのである。

宣教師の話を聞いて、多くの人が拒んだ。ヒートン伝道部長はその人々のことをこのように記している。「この地方の亡命者たちの中で働く宣教師たちにとって、イスラエルの子孫を世界のいや果てから集め来ることを予言した約束は現実なのだ。宣教師たちは毎日極東の各地から来た民と会っている。この民は自分たちの自由を守ろうという共通の願いから集まっている。少なくともそれは大半の人々が認める理由なのだ。しかし宣教師や、流浪の旅の間に福音の証を受け入れた人々にとっては、自分たちのこれまでの状態や環境は自分の励みとなる新しい意味を持つ。彼らは福音を学び、救いの福音の祝福が受けられる場所に集められているのだ。彼らにとっては、避難場が実際に『シオン』なのだ。」

この現代の「イスラエルの民」の多くが教会に群れ集まってくる。福音の真理を認め、感謝の心でそれを受け入れるからである。実際、香港の改宗者数は多すぎて、一番の問題はその受入れ方である。新しい改宗者は福音の概念についてさらに教えが必要であり、支部で何かの仕事を受け、隣人への奉仕によって活発な働き人となる必要がある。

香港の教会員の当面するチャレンジは多い。追放と家族の迫害、移住による教会員数の減少等。香港の教会員はそれらのチャレンジに遭遇しながらも、それを克服し、教会が除々に力を加えていくことを証明しているのである。現在は13支部に4千人の教会員がいる。7つの教会堂があり、そのうちふたつは標準の、もうふたつは改造の教会堂、あとの3つはビルの一室を借りて使っているものである。地方部センター用の土地もすでに購入ずみである。以前はアメリカ人宣教師に指導されていた支部と地方部は、現在は全員が中国人指導者であり、すべての支部に長老定員会が組織されている。香港で働くフルタイムの中国人宣教師は17名で、そのほかに大勢の地方部宣教師がいる。

香港を出る人々の思いも、恐らくは変わってきているだろう。ある兄弟が、「中国人として生まれたからには、中国人であることに意味があるのです。香港にとどまって地域の兄弟たちに奉仕することが、神への一番の奉仕だと思います。」と語ったが、多くの教会員がこのように感じ始めている。

香港の教会が会員数においても力においても成長を続けるとき、エズラ・タフト・ベンソン長老が1970年に述べた次の言葉は成就しつつあるのである。彼は、今こそ世界のこの地域に福音の教えが受け入れられるときだと語った。「主のみ旨にかなうとき、今や扉は開かれる」と。

険しい頂とそびえ立つ信仰

台　湾

エンサイン編集特別主幹
ジャニス・クラーク

1956年6月初旬のあるうららかな日に、南部極東伝道部の4人の長老が汽船で香港の港を発ち、「悪い報告ばかりを聞いていた」かの地、台湾に向かった。

「しかし……」とウェルドン・J・キッチン長老は報告している。「私たちは台湾をこの目で初めて見たとき、心をすっかり奪われた。山々が、まっさおな海にそびえ立ち、てっぺんは青空を射るようだった。山の険しさにもめげず、暗緑色の草木がびっしりと島をおおっていて乾いた土地は見当たらなかった。

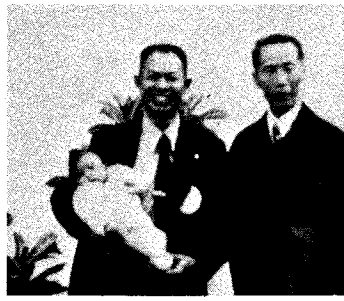
「美しい島」という意味の台湾の島に、伝道活動はこうして細々と始まった。しかし4人の長老は孤立していたわけではなく、合衆国軍人のグループが組織された。ただ中国や台湾の教会員はいなかった。長老たちは前もって9カ月間公用の中国語を学習していた。

初めての土地に福音を宣べ伝え始めるときには、必ずと言ってよいほど苦労がつきものである。初めの4人と、10月にまた派遣された、もう4人の宣教師は中国語の図書をほとんど持っておらず、モルモン経が翻訳されるまでに10年もかかった。（求道者は新約聖書を読むように言われた。）政府からは教会に対して何の干渉もなかったが、多くの宗派がいちはやく文書を発行して、信者たちにモルモンの宣教師の話を聞かないように警告した。しかし長老たちは、それが「人々の興味を呼び、悪いどころか良い結果になった」と報告している。

土地が得られる見込みはほとんどなかった。住んだり集会に使ったりする家を見つけるのもむずかしかった。初めはたいていの集会を宣教師のアパートで開き、いつも35名ほどが出席した。

1957年5月には反米暴動が起こり、宣教師は「米軍屋敷」に数日間避難した。長老たちは病気に用心しなければならず、言葉はいまだに大きな壁となっていた。

しかし1957年の暮れまでには台湾全土で50名ほどのバプテスマがあった。



1958年にはさらに120名のバプテスマがあり、年の終りには6都市に31名の宣教師が働いていた。1959年にはマーク・E・ピーターセン長老が台湾を訪れ、この地を福音伝道の地として奉献した。教会幹部の訪問はそれが最初であった。（デビッド・O・マッケイ大管長がずっと以前に中国全体を奉献してはいたが。）伝道活動の開始以来3年半を経過した1959年末には、8支部が組織され、宣教師は45名に増え、そ

のうち14名は土地の聖徒たちであった。

1960年代は全般を通じて発展の一途をたどったが、その2大事業が台北と高雄に建てられた大きな礼拝堂とモルモン経の翻訳完了であった。指導者の養成にも力が注がれた結果、1965年中には16支部中11の支部を地方の兄弟たちが管理することとなった。

1971年1月11日、南部極東伝道部に伝道の経験を持つマラン・R・ジャクソン長老が、台湾台北伝道部の伝道部長として赴任した。現在は3地方部を擁する伝道部と合衆国軍人の地方部と30支部、7千人以上の教会員がいる。平均200名の宣教師が全時間を伝道に捧げており、現在の伝道部長はトーマス・P・ニールソンである。台北、台中、高雄に3つの礼拝堂があり、台東にも現在建築中である。教会機関誌は「聖徒の声」という名称で広く読まれている。神殿訪問のために出国の許可を取るのはむずかしいが、古い記録によって系図を何千年も昔にさかのぼることができる。地域の教会員の喬瑟芬王（ジョセフ・ワン）兄弟がコーディネーターとなって、中国人の3地方部に活発なセミナリーとインスティテュートが開かれ、420名ほどの生徒が登録されている。

台湾の人々がこれほどに福音を受け入れやすいのはなぜなのだろうか。当時嘉義支部長の張翔（チャン・チェン・シャン）兄弟はこの疑問に対して、台湾台北伝道部の月刊誌の中で次のように返答している。

「中国は5千年の文化、文明、伝統を持つとよく言われる。現在も中国人の多くが神を拝む風習に従っている。彼らは、神の姿を取った偉大な力が全自然、全宇宙を支配すると信じている。台湾では太陰暦の1月9日に4種類の果物を供えてその神を拝む。彼らの神に対する概念がたとえ多くの点で異なっていようと、中国では神々への信仰は昔からの伝統なのである。

中国人がなぜ教会を受け入れやすいかということのもうひとつの理由は、中国文明である。古代、中国は東洋最大の文明国であった。代々の王朝は世界各国の客人を歓迎した。中国は何百年にわたり、あらゆる職業、国籍、宗教の人々を自国に迎え入れ、その文明の利点を吸収した。大勢の中国人がその進取的な文化交流に啓蒙され、時がたつうちに段々と、中国人は外国の文明や宗教を受け入れやすくなっていったのである。私たちの教会の福音は外国人によって紹介された文明のうちでも最もすぐれたものなので、神の真理はそれに出会う多くの中国人から愛されるのである。

中国社会は家族と国家と文化に土台を置く。大半の中国人は非常に強い愛国感情を持っているが、それは中国人が情というものに大きな価値を置いているからである。イエス・キリストの教えも愛などの徳高い感情を中心としているので、中国人はキリストとその教会に対して実に友好的である。

もうひとつ特筆すべき興味あることは、中国人の慣習が古代イスラエルとほとんど同じことである。多くの中国人は宣教師から初めて福音を聞いたときに、救いの計画や神の存在に共鳴する。彼らは先祖を敬い、拝んだりもする。仏壇を作り、家系図を作る。中国の系図信仰の素晴らしさのゆえに、私は家系を4千年も昔まで調べることができたのである。（*The Taiwan Missionary* 「台湾伝道」1973年7月号）

福音を受け入れることの典型的な例が蚵寮支部である。王天徳（ワン・チェンタイ）兄弟は18年間、特定の教会に属さずに蚵寮でキリスト教信者のグループに説教師として福音を説いてきた。王兄弟の娘が宣教師に会ったとき、什分の一や、禁酒、禁煙、日々の祈り、聖書の勉強、水に沈めるバプテスマなど、父親の教えていたことと多くの点で共通していたこともあって、彼女は宣教師の言葉を真理だと思った。彼女はその教えを父に伝え、しばらく後の1973年4月1日、王兄弟一家はそろってバプテスマを受けた。その日、王兄弟は信者たちに次のように言った。「18年間、私は皆さんにバプテスマを授けてきました。しかし私は権威を持たないでそれを行なってきました。福音は回復されて、神権があります。皆さんは私についてきて下さいました。

これまで何年も私を羊飼いとして信頼して下さいました。どうか、きょう、私について、バプテスマの水に入って欲しいと思います。」その同日、50人の信者がバプテスマを受けた。彼らの小さな礼拝堂はこの教会に委譲され、すぐ後で王兄弟が支部長に按手任命された。

中国文化は台湾の人々にとって非常に重要だが、それは急速な教会の発展にも影響を及ぼしたと言えよう。儒教、道教、仏教もキリスト教と同様大きな影響力を持つ宗教であるが、伝道活動が始まってからの10年間に特定の宗教に正式に所属する人の数が2パーセントから5パーセント以上に増加した。

台湾の人々の生活に大きな位置を占めるもうひとつの重要な要素は、その政治的立場である。台湾は1949年以来、中国全土の支配権を主張する国民党政府の下にある。1949年当時、中国共産党は中国本土を支配し、国民党は独自に台湾を興した。1971年に国民党は国連から追放され、共産中国が議席を得た。1949年の危機に政府を導いた蔣介石総統は、去年の4月に死亡するまで現役で指導を続けた。

現在の教会が当面するふたつのチャレンジは、文化と政治の情勢である。ほかにも、初期の宣教師が遭遇したとはまったく違う問題がある。しかし台湾の教会員は高い目標を持っている。強力な指導力とステーキ部設立と、神殿事業の推進、活発化活動、そして1600万近い民への伝道と。

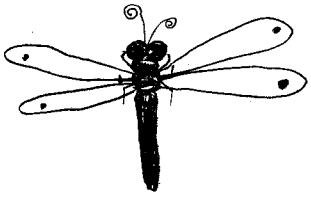
張翔兄弟の言葉は、台湾の聖徒たちの将来への展望を語っている。「私は台湾の伝道活動が将来もいつも盛んだと信じています。神はいつも教会の中国人を心にかけて下さいます。台湾の宣教師と教会員が強い信仰を持って、立派に耐え続けることができるように祈っています。」

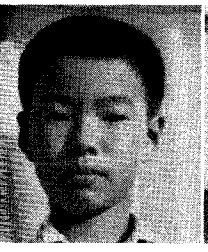
しぶや　ひろかず　　かっやま　あさこ

日本のお友だち

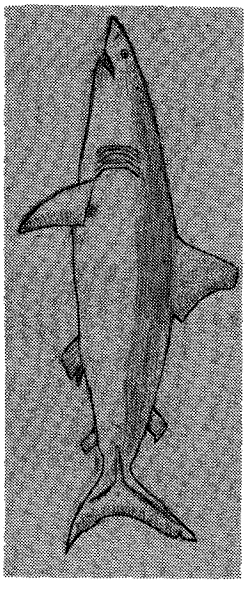
ジュディ・シエル・バスク

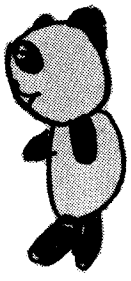
おかむら　やよい　　かさい　きんや

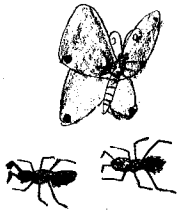




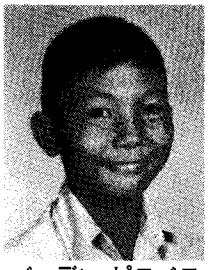
あまの　たかし　　ほそかわ　たかよ　　ささき　たかあき　　ほそかわ　きよ　　かさい　まさとし　　おかむら　みなえ　　ほりい　ひろし

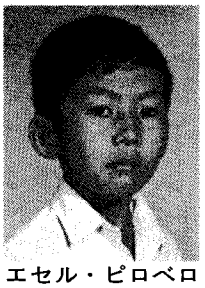






フィリピンのお友だち


バーデン・ピロベロ


エセル・ピロベロ

ラボンネ・ジュンプ

ジャネット・ラミレス

ジョビタ・サリナス，ローデス・サバ

ジャミー・ラミレス，レオニロ・ラミレス

フィリピン共和国は、一年を通じてあたたかく、木々はいつも緑色をしています。こどもはオーバーコートなど着たことがありませんし、もちろん雪など見たこともありません。

フィリピンの家族はこどもが多く、6、7人いるのがふつうです。家族は小さな家に住み、その家が集まって村をつくっています。ほとんどの家が土地をたがやしたり、家ちくをかったりしています。いなかにいくと、たいていの人がお米を作っていて、家族みんなが仕事をてつだいます。ですから、なわしろにまいた種が大きくなり、それを田に植えかえ、そこで大きく成長し、ほが重そうに頭をたれるまでの長い間のことを、こどもたちでもよく知っています。

14年前にはじめてフィリピンに宣教師が送られてきました。今では教会員は20,000人にもなりました。会員はたいていマニラに住んでいますが、フィリピンのあちこちに支部や伝道所があります。

末日聖徒のこどもたちは、プライマリーや日曜学校に行くのがだいすきです。家では毎週月ようびに、家庭の夕べをひらきます。こどもたちはレッスンのおてつだいをするのがいつも楽しみです。

フィリピンはいくつかの地方にわかれていて、それぞれに方言があります。ですから、ほかの地方に住む人びとのことをりかいするために、いろいろな方言を勉強しなければなりません。教会員はほとんど英語を話します。ですから日曜学校やプライマリーはふつう英語で行なわれています。

アルウィン・リム

ミッシー・リム

ミシュレネ・リム

アベレル・リム

マイレネ・リム

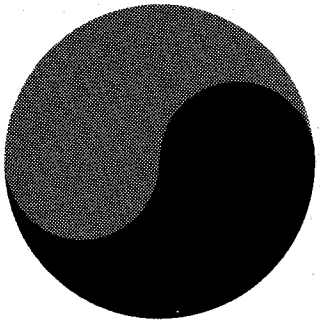
アングスティア・タン

ホンコン
香港のお友だち

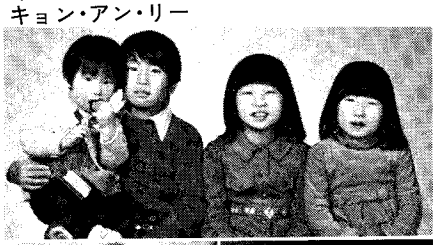
1．カウ・チャウ・ハン
2．シャン・ヤン・チク
3．オー・ヤン・チー・コン
4．ング・ポー・イー
5．エル・マカ・ミン
6．チャウ・カ・キー
7．チャウ・キム・チン
8．チャウ・カウ・ファ
9．オー・ヤン・チー・ミン
10．ウォン・シュー・ミン
11．オー・ヤン・チー・コン
12．チャウ・カ・キー
13．カウ・チャウ・ハン
14．チャウ・キム・チン

韓国(かんこく)のお友だち

ボー・ヒー・ハン



左より
キョン・イー・リー
ビョン・リョル・リー
キョン・ヒー・リー
キョン・アン・リー



ミー・ヤン・チョイ

キョン・アン・イー

ミーン・スーク・キム

チュル・スン・パク

ミー・ヒュン・ナム

チュー・ユン・ホン

スン・クー・カン

チョイ・ユー・ホワン

ター・ジー・キム

ヒー・ミン・チョイ

ヒョー・ジン・パク

チュル・スン・パク

スク・ヨー・キム

ユン・スーン・イー

ヨーン・イーン・パク

左より
ユン・スーク・パク
スン・キュー・パク

ビョン・ヨー・パク

チー・ユン・パク

ハク・エン・イー

左より
ノ・ユル・パク
チャン・キュー・パク
シン・キュー・パク

チーン・ヒュン・チ

台湾（たいわん）のお友だち

こどものころのことを考えると、時間のたつのはとっても早いなと思います。心に残っている一番楽しい思いでは、プライマリーに行ったときのことです。そこでイエス・キリストの大きな愛について学んだり、主をさん美する歌を歌ったりしました。短い劇を作ったり、ゲームをしたりもしました。先生たちはよく教えてくださり、私たちがよいところをのばせるように助けてくれました。

プライマリーを卒業するとき、卒業証書と開拓者の旗をもらいました。うれしくて、どう言ったらいいのかわからないくらいです。教会のひとつのコースが終わったしるしのこの美しい旗を手にすることができて、とってもうれしいです。でも、もうプライマリーに行けないのかと思うと、さみしいです。

———ウェン・チェン・イ

ある日庭にいると、ふたりの外人の女の人が家に入ってきました。ふたりはドアをノックすると、宣教師だということを話しました。そこでふたりを中にまねき、お母さんをよんできました。

それから福音の勉強がはじまったのです。そしてすぐに教会に入りました。学校の先生も教会員でした。そして生徒たちに、プライマリーや日曜学校に出席するようにと言っていました。

台湾のこどもたちは学校がいそがしいです。遊ぶ時間などあまりありません。でも休日には魚つりに行ったり、山に登ったり、泳いだり、それに家でチェスをしたりします。

たいていの人は仏教徒です。おまつりになると、紙のお金を焼いて、かんしゃく玉を爆発させ、家に幸運を招き入れ、悪魔を追い払います。

———リウ・チェン・チェン

ある日ふたりの長老がやって来て、福音について話してくれました。家族はみんなこの話に感動してしまいました。

家族がバプステマを受けてしばらくしてから、私にもバプテスマのときが来ました。教会が思ったよりもすばらしく、聖いことを感じました。教会に足をふみ入れ、おだやかなさん美歌とピアノの音を聞くと、いつも喜びでいっぱいになります。さん美歌を歌っているときはなおさらです。

時間がたつのはほんとうに早いと思います。教会に入ってもう3年になります。これからも福音をよく学び、りかいしなければならないと思っています。末日聖徒イエス・キリスト教会はほんとうの教会です。神様のいましめを守って、清い生活をし、教会を大切にしたいと思います。

———リン・ウェイ・ウェイ

ぼくはチン・ファーです。小学校3年生です。お父さん、お母さん、それにきょうだい6人でくらしています。みんな教会員です。一番上のお兄さんはＢＹＵのハワイキャンパスにいます。もうひとりのお兄さんは台湾で勉強しています。

家族は教会がこの国にできてからずっと活発です。今では教会のない生活なんて考えられません。ここにいる多くの会員がぼくのことを心から愛してくれます。ぼくはきょ年8さいになったのでバプテスマを受けました。ぼくは家庭の夕べのような教会の活動がだいすきです。

天のお父さまはぼくたちを愛してくださいます。この世はとても美しいところです。神様がほんとうの教会を与えてくださり、愛されながら成長できるので、とてもうれしいです。

———チン・ファー・シャン

8さいのとき、お母さんが私を教会に連れていってくれたので、教会についてよく知るようになりました。

プライマリーでいろいろなことを学びました。何かこまったことがあると、プライマリーの先生が助けてくれました。プライマリーを通して、私はいろいろなことを学び、証を得ることができたのです。これは神様からの祝福です。よい教会員になれば、もっと多くの祝福が得られることも知っています。

———テン・チィア・チイ

ぼくの家族は全員教会員です。お父さんは学校の先生です。やさしくて、こうふくにしてくれます。お母さんもやさしいです。ぼくたちのために一生けん命働いて、いろいろなことをしてくれます。そのようにしてくれるお母さんに感謝しています。

ぼくには3人のお姉さんがいて、いつもどうしたらよい子になれるかを教えてくれます。ときどきけんかをしますが、とてもいい友だちです。

末日聖徒イエス・キリスト教会はほんとうの教会です。ぼくの家族は神様が与えてくださった永遠の家族であることも知っています。

———リ・マン・チェン

小さなお友だち

お母さんはよいむすこをもちました

十二使徒評議員会補助
アドニー・Y・小松

わたしは34年と少し前、まだ高とう学校に通っていたころ、はじめて、せんきょうしに会いました。せんきょうしはＭＩＡのバスケットボールのチームに入るようにといいました。教会のことは、なにも知りませんでしたが、バスケットボールは大すきだったので、ＭＩＡに行きました。それから、日よう学校にも、せいさん会にも行くようになりました。

１年のあいだ教会につどい、せんきょうしといっしょに、ふくいんを勉強しました。ジョセフ・スミスが、はじめて神さまと会った話を読み、バプテスマをうけて教会に入ろうと思いました。その夜、わたしはバプテスマをうけようと決心し、家に帰ってお母さんに話しました。お父さんは、もう死んでしまっていませんでした。

お母さんの目から、なみだがあふれました。なぜ、なくのですか、と聞きました。

お母さんは、いいました。「うれしくて、なくんじゃありませんよ。かなしいんですよ。」お母さんは、また、むすこをうしなわなければ、ならなかったのです。お父さんがしんだあとお兄さんもしにました。お母さんは、わたしを、キリスト教会に、とられてしまうといいました。

お父さんがしんだあと、お母さんはそのベットのわきで、子供たちを、りっぱな仏教とにしますと、やくそくしたのです。わたしは、１年間、せんきょうしたちとまじわっていたこと、いつもよいことを学び、わるいことは、なにも学ばなかったことを話しました。

そして、もしバプテスマをうけたあと、お母さんをこまらせたり、はずかしい思いをさせたりしたら、教会に行くことをきんししてもいいです。口答えはせずに、お母さんのいうとおりにします、とやくそくしました。

それから、こういいました。でも、もしよい人になって、お母さんをたいせつにして、家族や弟や妹にしんせつにできるようになったら、こういいますよ。「ずっとつづけて、教会に行かせて下さい。教会は、えいえんの生命をうけるために、いろいろなことが勉強できるところなのです。」

わたしは、お母さんにとめられないかぎり、教会をはなれなくともよくなったのです。それからは、せんきょうしに教えられた、ふくいんのげんそくにしたがって生活し、自分でも、げんそくを勉強しました。そして、天のお父さまから、しょうらい、お金にこまることはけっしてないという、かくしんをえました。

バプテスマをうけてから、ずっと、ふくいんのげんそくを、実行してきました。マタイ伝のこのせいくが、大すきです。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ６：33）

おもちゃばこ

おとうさん：大きなこえで、おいのりしておくれ、きこえないじゃないか。
おんなのこ：いいのよ、おとうさんにおいのりしてるんじゃないんですもの。

ある夜のこと、ダニーはロニーのおいのりをたすけてやっていました。ロニーは、よいことばがみつけられなくて、とちゅうで、なんどもつっかえました。ダニーは、じれったくなって、こういいました。「はやくしろよ。天のお父さまのじかんを、むだにするんじゃないよ。」

ビビアン・コーベット

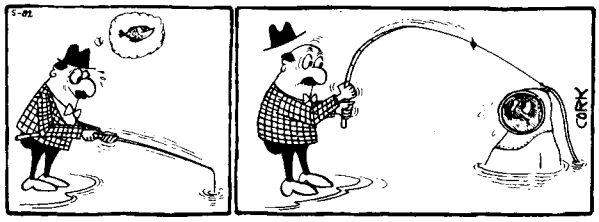
なにが、かくれているかな

ビバリー・ジョンストン

おにわに、いろいろなものが、かくれています。さがしてあげてください。ウサギ、エンピツ、メガネ、コトリ、アヒル、アイスクリーム、コップ、カサ、ハンドバッグ、カタツムリ、クツ、チョウチョ、アイロン、サカナ、タコ みんなみつかったかな。

てんをむすんでみましょう

このどうぶつは、木にのぼりもせずに、高いところのはっぱをたべます。さてなんでしょう。



この中に虫が6ぴきかくれています。
さあ、見つけて、色をぬりましょう！

日本 日出づる国の福音の光

渡辺騷、坂井圭、八木沼修一
ミルドレッド・E・ハンディ
グレース・フラム

「日出づる国」——素晴らしい島国、日本を言い表わそうとする詩的表現は数多くあるが、これもそのひとつである。この島国はアジア大陸の東の海に、まるで幸福な家族が手に手を取り合っているかのように、浮かんでいる。この国こそ、4半世紀という短期間に、

原爆の死の灰の中から立ち上がり、富と指導力とを獲得して、世界の大国の仲間入りをした国なのである。

戦後の日本の変化と復興について語る例として、1948年にこの地で伝道活動を再開して以来、末日聖徒イエス・キリスト教会がたどった足跡ほど、良い例はないであろう。第二次世界大戦が終わる頃には、教会と、日本に残されている会員たちとは、全く連絡が取れなくなっていた。1924年に、ヒーバー・J・グラント大管長が、もっと「好ましい時期」になるまで、日本における伝道活道を暫定的に中止する決定を下したのである。だが、大戦の終結と共に、確かに、「好ましい時期」が到来した。伝道部が閉鎖されるまでの23年間に、バプテスマを受けた人は174人であった。だが、伝道が再開されて以後の27年間に、6つの伝道部と3つのステーキ部でバプテスマを受けた人数は、2万5千人にも及び、現在でも毎年約3千人がバプテスマを受けて教会に加入している。

日本の復興の奇跡を理解し、その未来の可能性を探るためには、急速な工業化や経済的な繁栄といった表面的な面だけではなく、更に一歩進めて、日本人の国民性について研究する必要があろう。イエス・キリストの福音の持つ力は、人種的、文化的な壁をのり越えて、人々の生活を変えているが、この力を理解するにも、同じことが言える。つまり、日本人の様な民族の中で、この力が実際に、どう機能しているのか、これを調べる必要があるのである。日本人の精神は、今でも、その文化の中に深く根をおろしている。この文化は、ローマ帝国が滅亡への道をたどっていた頃、見事に咲き誇っていた文化なのである。

日本は、温帯、しかもアジア季節風帯の北東の端にある。人口は、1億1千万人、面積は約37万平方キロメートルある。また、日本は山の多い国である。湖、火山、大小の河川、細かく区切られた田園が各地に見られ、また小高い山の頂には、松や杉の林に囲まれて、神々を祭る社が見られる。日本はまた、桜の国、雪の王冠を頂く富士山の国である。日本は、北海道、本州、四国、九州という4つの主要な島と、その近辺の数千という大小の島々から成り立っている。気候は、北は北海道の北欧並みの寒冷地帯から、南は九州沖縄の亜熱帯の温暖地帯まで様々である。

日本は、アジア本土から地理的に離れていたために、極めて独特の文化を発達させた。比較的、外来思想の導入や外敵の侵入が少なかったのである。このように世界の国々から孤立していたために、日本人の心には、母国との一体感が育まれたのであろう。

だが、このようにアジア大陸から離れていたにもかかわらず、中国だけは、日本の文化に深い影響を及ぼした。中国は、日本に漢字と禅を伝えた。この禅は、もともとインドから中国に伝わった宗教哲学であるが、これが、朝鮮半島を通って、日本に伝えられたのである。

静的な内省に重きを置き、自ら大宇宙と調和することを旨とする禅は、次第に日本人の生活の様々な面に溶け込んでいった。芸術、文学、建築、音楽、風習、習慣に至るまで溶け込み、日本人の生活の最も洗練された、表現様式となった。例えば茶道であるが、これは人と宇宙を調和させることにその目的がある。静かな気持でお茶を立てることにより、人は、真の己を知るようになるのである。

宇宙との調和は、日本の庭園にも見られる。日本の建築物は、そこに住む人々が、四季おりおりの自然の気持に浸れるように作られている。日本の庭園は、言わば、小宇宙である。庭園は、1個の芸術作品と考えられており、黙想の対象となるように作られている。岩、池、砂、樹木、石を巧みに配置して、山や海、森や平地を表わそうとするのである。花の姿は、ほとんど見当らない。この際、色彩は、大きな問題ではない。むしろ、調和とか多様性といったものが、その構造や、緑の陰で追求されるのである。

また、やはり、詩的調和というものの反映は、文学の中に、更には日本語そのものの中にも見られる。中国から漢字を導入した日本人は、この漢字から、漢字、ひらがな、かたかなという、3つの書体を編み出した。日本語で字をうまく書くためには、能筆家であると同時に画家でなければならない。この筆記と絵画は、しばしば一枚の作品に同時に表現される。これは、日本の芸術の好例である。ここには、自然と人との間に、実に密接な調和が存在しているのである。

末日聖徒イエス・キリスト教会が、日本人の心に回復された福音の豊かな教えを伝える業をすすめる際、言葉に対する問題は、最もむずかしい問題である。初めて日本に上陸した教会の宣教師にとって、言葉の問題は、目の前に立ちふさがる数々の難関のうちでも、最も恐ろしいものであったに違いない。

この難関を突破するためには、いつの時代でも、犠牲と義務に対する忠誠、そして敵の面前でもたじろがない勇気、そして挫折にくじけない根気強さが必要である。初期の長老たちは、最低5年間は日本に帯在して、日本語と日本の習慣を学んだ。こうして初めて効果的な伝道ができたのである。日本伝道部の最初の23年間に、およそ88人の宣教師が伝道したが、もとよりこの人数は、広大な働き場所を持つ日本としては気の毒なほど少ない人数であった。こうした長老たちの多くは、異常と思えるほど、喜んで犠牲を捧げた。さらに、文化面や言語面の問題に加えて、侮辱や、脅迫にも立ち向かわねばならなかった。また、多くの地域では、教会に出席する会員の人数が、5本の指に満たなかったところもあったのである。

1901年9月1日、日曜日の朝、ヒーバー・J・グラント長老は、18歳になるアルマ・O・テイラー長老と他のふたりの長老を伴い、東アジアで最初の伝道活動を開始した。グラント長老は、長老たちの小グループを率いて、横浜の南部にある丘の頂上の森の中へ入って行った。グラント長老は、そこで日本の地を「真理を宣べ伝えるために」献納したのである。若きテイラー長老の日記には、グラント長老の献納の祈りと共に、感動的で霊的な経験が、次の様に記されている。「長老の舌はゆるめられ、みたまが長老の上に力強くとどまった。その力が余りにも強かったために、神の天使が身辺にいるのを感じたほどであった。献納の言葉が長老の口をついて出るたびに、私たちの心は、いよいよ燃え立った。私は、いまだかつて、あれほど力強い祈りは耳にしたことがなかった。言葉の一つ一つが、私の骨髄の中まで貫き通った。」

だが、そうした決意と信仰にもかかわらず、長老たちの伝道活動は、人々と交わることができなかったために、実質的には何も進まなかった。配布用

の日本語のちらしさえ持たなかったために、このおとずれを説明することすらできなかったのである。だが、宣教師たちは、日本人の家庭に寝泊まりし、そこでは、毎日日本語を使うことを余儀なくされたため、日本語を理解し始めるまでには、それほどの日数を要しなかった。その宣教師の中でも、テイラー長老の上達の速さは、特に目覚ましかった。彼は、讃美歌を2曲翻訳したが、これは、伝道開始後1年たって開設された本部と東京の日曜学校で歌われることになった。日本人は、歌を愛する民である。そのため、このシオンの讃美歌は、日本人を教会に近づけただけでなく、改宗者が、信仰を守る上での助けにもなった。

1904年、アルマ・テイラーにモルモン経の翻訳という歴史的大事業の責任が与えられた。この間にテイラー長老は、伝道部長にも召された。彼はモルモン経を日本語に翻訳するにあたって並々ならぬ貢献をした。そして、6年近くその仕事に打ち込んだ末、翻訳を完成し、4冊の原稿を準備したのであった。2,100ページに及ぶローマ字原稿が1冊、日本語の原稿が3冊、これは合わせて1万1千ページ以上にも及んだ。そして、1909年の10月、遂に印刷に付されたのである。

伝道開始後、23年経とうという矢先、この時大管長になっていたヒーバー・J・グラントは、もっと好ましい時期が来るまで、「暫定的に」伝道部を閉鎖するという決定を下した。1924年8月に伝道部は閉鎖されたが、一時的な引揚げとは言うものの、だれの目から見ても、さほどの勝利を収めたとは言い難いものがあったことは確かである。モルモン経は、すでに翻訳され、出版されていた。その内容を理解し、それに従って生活する強さを見出した勇気ある日本人もいた。悲しみに打ちひしがれて、宣教師たちに別れのあいさつをする改宗者の聖徒たちの小さな群れの中に、奈良富士哉の姿があった。彼は、後に、このグループの管理長老に指名された。さらに彼は、この後に続く長い暗黒時代の間、忠実にその召しを果たしただけでなく、現在でも、日本東京ステーキ部の祝福師として働いている。

当時の日本人の教会加入という奇跡を理解するためには、日本の伝統と文化の力を理解する必要がある。例えば、知恵の言葉の戒めは、日本人には、全くもって理解し難いものであり、それだけにまた受け入れられる余地もなかったのである。日本では、客に対してお茶を出さなかったり、或いは、客の方で、そうした厚遇を拒んだりすることは、社会の礼儀（これが、日本では最も重要なものである）に最も反することなのである。同じことが、酒を飲むことについても言える。この酒は、家族の宗教的な行事があったり、社会的な行事や、休日があったりすると、決まって出されるものである。日本人にとっては、どんな行事も、宗教生活と深く関連しており、また、その人その人の丁重さをあらわすものなのである。

だが、何と言っても最大の障害は、日本人が神聖としてあがめている天皇に対する忠誠心であった。こうした考え方は、キリスト教を至上とする考え方と真正面から衝突している。人がその主君（天皇）に死に至るまで忠実でいるという考え方は、日本の社会が何世紀にもわたって培って来た資質の中でも、最たるもののひとつであった。

だが、こうした幾多の障害の中からも、改宗者は生まれた。しかも、宣教師が引き揚げ、教会のプログラムが中止された後の24年もの間、孤立と艱難に耐え得るほどの固い信仰を持った改宗者が生まれたのである。これは実に、イエス・キリストの福音がもたらした大きな奇跡のひとつと言えよう。

日本での伝道活動が中断されてから13年近く経ったとき、グラント大管長は、ハワイで、在住日本人のために伝道部を再開した。1935年には、オアフステーキ部で日本人支部が組織された。

ハワイの伝道部長ジェイ・C・ジェンセンは、日本軍が真珠湾にある米軍基地を奇襲したとき、アメリカ人の宣教師に向かって次の様に語った。

「真珠湾での出来事をかさに、日本人を憎むようなことがあってはなりません。日本人は善良な民族です。その指導者たちのとった行動は、彼らの責任ではありません。福音はやがて力強く日本へ戻って行きます。あなたたちが、このハワイにいる日本人を愛すると同じ様に、日本にいる日本人も愛さなければなりません。そして、現在、充分な時間がないものと思って働かなければなりません。あなたたちが気付いている、いないにかかわらず、あなたたちは、日本で教会を再び確立するために、その基礎を築いているのであり、備えをなしているのだからです。その日は、近い将来に必ずやってきます。」

ジェンセン伝道部長の予言の言葉は、文字通り成就している。現在、日本の伝道部を管理している6人の伝道部長は、皆日本人を先祖にもつハワイ人であり、またひとりを除いて、皆、ジェンセン伝道部長の時代に教会に改宗した人々である。日本で、教会活動を再開する頃に召された指導者の多くは、ハワイで教会に加入した人々か、或いは、日本ハワイ伝道部の時代に宣教師として働いた人々であった。

ジェイ・C・ジェンセンの後を継いで伝道部長となったエドワード・L・クリソードが、第二次世界大戦後初めて、日本での伝道活動を再開した。メルビン・A・ウィニッグが彼に同行した。彼はハワイで、宣教師として、また伝道部長として働いた人物である。だが、占領軍の中にいたモルモンの長老たちが、すでに道を切り開き、人々に福音を分かち与え、聖徒たちとの接触を始めていた。この聖徒たちこそ、いわゆる「暗黒時代」に耐えて、教会の光が戻って来る日を待ち望んでいた人々なのである。

伝道活動も、合衆国のモルモンの軍人の手で新しく始められた。ある時、ひとりの軍人が呼びとめられて暖をとりにその家に入って行くと、お茶を一杯すすめられた。彼は、化学の教師であったその日本人に、知恵の言葉について説明した。この教師は、佐藤龍猪、後に日本人として戦後始めてバプテスマを受けた人物であり、モルモン経の新訳、教義と聖約、高価なる真珠、その他重要な著作の翻訳をした人物であった。この同じ日、もうひとりの軍人、現在では十二使徒評議員会会員となっているボイド・K・パッカーが、佐藤姉妹にバプテスマを施した。

1948年3月、クリソード伝道部長は東京に到着してから程なくして、恵まれて伝道本部の地所として最適の建物を購入することができた。厚生大臣が以前から住んでいた建物で、多少爆撃のあとがある建物だった。日本の伝道部は、それまで自分たちの建物を所有したことがなかった。そのために、永続性が感じられなかったのである。初期の聖徒たちもやはり、自分たちの建物を所有したいと熱心に考えていた。1924年に日本から伝道部が引き揚げた、あの試練のとき、永続性のあるものが

何ひとつなかったことを痛感したのである。着任早々の伝道部長が建物を購入したとき、日本の聖徒には、これが「末日聖徒イエス・キリスト教会は、ずっと日本にとどまります。二度と引き揚げることはありません」という証明になったのである。マシュー・カウリー長老は、この修復なった建物を伝道本部として献納する際、予言して、「この地には数多くの教会堂と、さらに数々の神殿が建てられる」と約束した。

1948年6月、戦後初の宣教師が5名、日本に到着した。その年の末までに、宣教師の数は、日本人を先祖に持つ6名のハワイ人を含めて、17名になった。初期の伝道活動が不成功に終わったこととは対照的に戦後の日本で教会が大きな成功を収めたことには、無論、数々の理由があった。その中でも最大の理由のひとつは、情緒的な風潮が一変したことにある。日本人は、敗戦によって手痛いショックを受けていた。そして、自分たちの人生を建て直す方法を捜し求めていた中で福音に耳を傾ける準備のできた人が多かったのである。

こうした気持の変化を、改宗者のひとりである吉沢敏郎は、次の様に述べている。「1945年8月15日に、日本が降伏したとき、日本は不滅であると信じていた私の確信は、音をたてて崩れ始めました。天皇を神と考えていた私は、精神面の切り換えを、どうしてもしなければなりませんでした。確信を失ってしまい、何をしたらよいのか、全く途方に暮れていたのです。」

彼は、様々な宗教を研究し、古代の日本人がした様に、霊的に目覚めようと努めた。だが数々の試みも、徒労に終わっていた。そんなある日、彼は街頭でモルモンの宣教師に出会った。彼は、その宣教師の霊性に、態度に、そしてその教えに強く心を引かれた。

「何かを求めて飢え渇いていた私の心は、その宣教師に、またその飢えに、強く引きこまれていきました。砂漠で見つけたオアシスの水の中に飛び込んでいくような思いでした。……そして、これを契機として、モルモン経を中心に、神の福音の研究にとりかかったのです。宣教師の家や日曜学校がその会場でした。この研究に全力を傾けることによって、私は、理論の面でも、感情の面でも、神の福音が真実であるとの確信を持つようになりました。」

戦後、日本を訪問した教会幹部たちは、将来アジアの諸国に福音を広めるにあたって、日本人がどの様な役割を果たすのか予言し、強く証した。これからの日本の姿を考えるとき、その様な予言が今までに成就しつつあるという証拠が数多く見られる。

そのひとつは、ハワイ神殿訪問を契機にして、日本人聖徒が、霊的に成熟してきたということである。ドウェイン・N・アンダーセン伝道部長の指導の下に、1965年7月、166名の日本人会員が、初めて、ハワイ神殿への団体旅行に参加したのである。このとき、ハワイ神殿では、日本語でセッションが行なわれた。それ以来ハワイへの神殿訪問は毎年続けられ、日本人聖徒の信仰生活の中で貴重な霊的体験の源となっている。

もうひとつの重要な出来事と言えば、大阪で開催された1970年の万国博覧会にモルモンパビリオンが出展されたことであろう。約600万の日本人がこのパビリオンを訪れ、その結果、宣教師が処理し終わるのに何年もかかるほどの、訪問者カードができあがった。

また、モルモンパビリオン開館の当日、東京ではアジアで最初のステーキ部が組織された。数日後、1968年に最初の分割が行なわれていた日本伝道部が、再び分割され、新たに、ふたつの伝道部が作られた。それから2年後の1972年9月、2番目のステーキ部が大阪で組織された。さらに1974年10月、東京ステーキ部が分割され、新たに横浜にステーキ部が作られた。この間に、日本中央伝道部も日本東伝道部も共に分割され、新たにふたつの伝道部が組織された。

伝道の発展に歩調を合わせて、完全な教会プログラムも地元の指導者の養成も進められてきた。日本のセミナリーとインスティテュートには、日本人の指導主事がいる。十二使徒評議員会地区代表の渡辺驩は、日本人として、初めて伝道部長になったが、現在では、東京に本部をおいて、全アジアの教会の翻訳配送事業の監督をしている。また、東京ディストリビューション・センターの職員は、皆、日本人の会員である。

日本の教会は、他の面でも同様に、成長の途にある。最近発表された方針によって、教会幹部が何人か選ばれて、合衆国の外に居住することになったが、アジア及び極東地区に駐在する教会幹部として、十二使徒評議員会補助で、日本人を先祖に持つハワイ人のアドニー・Y・小松長老が召された。この新しい方針によって、東洋の人々に、また大いなる祝福がもたらされることであろう。

強さの原因をもうひとつ挙げるとすれば、活発な建築プログラムである。このプログラムを通じて、通常2年間建築伝道に召された建築宣教師たちを訓練するのである。そして、この様な建築宣教師の多くは、建築が終わったとき、フルタイムの福音伝道に召されて出かけて行く。さらに、伝道から帰る頃には、霊的な指導者になるべく、確固たる地位に向かって歩み出すのである。また、建築部と不動産部の地域監督を除いて、教会堂建設部門の職員も日本人である。

また、教会では、系図部門でも地元の日本人が系図協会の代表に召されて、その職員も増員され、可能な限りの、記録や重要な統計資料をフィルムに収めている。この系図活動は、特に日本人聖徒にとって身近なものである。日本人には、家族の中に強い絆があり、また、先祖に対して深い尊敬の念を抱いているからである。

ここ27年間の日本の教会の成長ぶりは、奇跡である。信仰の奇跡であり、証の奇跡である。冷たく暗い夜が明けた後昇る太陽のような、神の愛の奇跡である。今、私たちの目の前には、日本人の先祖を辱めることなく、また社会の伝統を崩すことなく、イエス・キリストの福音を原動力としてその生活を大きく変えることができるという明白な証拠が数多くある。

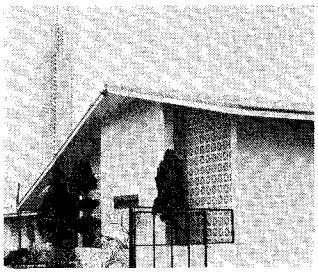
だが、これは日本人にとって必ずしも容易なことではない。良い末日聖徒であると同時に良い日本人でいるためには、教会員は、旧来の思想を新しい様式に適合させなければならない。また、同僚や仲間の中でも、あくまでもがんばり続ける勇気も必要である。だが、これは控え目に、しかも愛想よく振る舞うようしつけられた世代の人々には、なかなか受け入れられない。このために、どんな状況の下でも必ず知恵の言葉の戒めを守る、ということも非常にむずかしい。知恵の言葉では、肉体を神の宮と考え、霊をその宮の中心と考えているからである。だが、たとえ困難であったにしても、知恵の言

葉に従って生活することにより、人は宇宙との完全な調和ということの真実の意味を一層身近に感ずるようになるのである。何世紀にもわたって行なわれてきた慣例をすべて守っても、これほどの感じを得ることは決してない。

立派な日本人なら、祖先を崇敬し、各家庭の仏壇に先祖を祭り、特別な祭礼によって先祖に敬意を表わすことになっている。その様な祭礼のひとつにお盆がある。毎年8月のこの時期になると、数家族が祖先の家に集まり、盆踊りや行列や祭礼によって、死者をあがめ、その霊を一時的に呼び戻すのである。一方、立派な末日聖徒は、もっと意義深い、心のこもった方法で、祖先に対する敬意を表わすことができる。つまり福音が強く説いているのは、日々家族関係を神聖に保ち、永遠に家族の絆を堅固なものとし、そして、死者の系図記録を収集するということに他ならない。

自らを神の子と考えることにより、すなわち肉体的にも霊的にも、聖なる御方の姿、形に形どって造られた文字通りの子孫であると考えることにより、日本人教会員たちは、自分が何者なのか、ありありと思い浮かべることができる。そこでは、庭園の岩やかん木のように、ただ調和するだけではなく、庭園の創造者として働く姿が見えるのである。造られるのではなく、造り上げる方の働きをするのである。また真の意味で、天地との関係も理解することができる。成長の過程にある神々として、人生の本質を、美と真実に満ちた、一層大いなるものにすることもできるのである。創造主なる天父が宇宙の統治に用いておられる律法に見事に調和した従順な生活が、その鍵である。

日本に住む私たちは、まだその表面すら体得していない。モルモン経の偉大な教えが広く知られ、また日本人全体にもっと深く理解されるようになるにつれ、日本の教会の発展の可能性は、また全アジアの教会の発展の可能性も、際限がないほど、大きくなるのである。何千、何万という人々が、信仰の太陽が、日出づる国から昇り始めた、と証している。そして、こうした強い証の中に、未来は確かに約束されているのである。



東洋の不死鳥

韓　国

「朝なぎの国」、韓国は、3,500万の人口を擁し、東アジアに横たわる起伏の多い半島の国である。

この国の気候は四季はあるものの、国民性に似てかなり温暖である。韓国人は中国人や日本人とは先祖が異なり、昔から単一の民族である。彼らは忍耐強く、楽観的、理想主義的、そして少々内向的である。

今から25年前、「朝なぎの国」の穏やかな日曜の朝の静けさは、大砲のとどろきに打ち破られた。1950年6月のことである。その朝に端を発した戦争は以後3年間続き、200万人の命を奪った。

その戦争で予期もされない奇跡が起きた。韓国民にイエス・キリストの福音が伝わったのである。戦闘は国民に苦難をもたらしたが、同時に数千人の合衆国軍隊が派遣され、その中に数百人のモルモンがいた。短期間のうちにそれらの軍人が同僚の韓国軍兵士に証を伝えて、末日聖徒の讃美歌が声高らかに聞こえるようになったのである。

戦争の灰塵の中から、韓国は不死鳥のように立ち上がった。ソウルは600万の住人を持つ近代的な首都となった。しかし、広く知られた韓国の経済的復興よりもさらにきわだつのが、この国における末日聖徒イエス・キリスト教会の急速な発展である。末日聖徒の軍人が初めて韓国人の兄弟たちに自分の信念を分かち与えたときから、教会員の人数は16都市に1万人近くの聖徒を持つに至っている。韓国ソウルステーキ部には8ワード部と2支部があり、2つの伝道部には21の支部がある。教会所有の礼拝堂は12を数える。

韓国の教会に及ぼす末日聖徒軍人の影響は今もなお大きいが、現在ではそれに匹敵するのが、韓国ソウル伝道部と韓国プサン伝道部で働く300名のフルタイム宣教師と、アジア大陸で最初に組織された韓国ソウルステーキ部に属するおよそ5千人の教会員の働きである。

戦時中に教会に加わった人の多くが、現在は指導者として働いている。その中のふたりが韓国ソウルステーキ部の李虎男（ホー・ナム・リー）ステーキ部長と、この7月に新設された韓国プサン伝道部の韓仁相（ハン・イン・サン）伝道部長である。

李ステーキ部長は教会を知ったきっかけをこう述べている。「韓国の聖徒たちの指導者の多くがそうなのですが、私も戦時中にモルモンの仲間から回復された福音のことを聞きました。交戦の最中に開かれたＭＩＡの集会に出席して、兄弟と呼ばれたことや、合衆国軍人の人たちから暖かい握手を受けたことにびっくりしました。（それまでは軍人といえば厳しい態度しか見なれていなかったものですから。）それから何週間かの間、私はＭＩＡに連れて行ってくれた若い末日聖徒の軍人をよく観察しました。彼は当時はやっていた悪に、手を染めませんでしたし、タバコもアルコールも飲まず、まじめに純潔の律法を守っていました。この変わった青年の模範は私を捕えて離さず、それからまもなく、私はバプテスマを受けたのです。」

韓仁相伝道部長はこう語る。「私の話も月並なんですよ。戦争が始まったとき、私は13歳で、まだ毎日を遊んで過ごすやんちゃな少年でした。そんなわけですから、勃発した戦争は実にショックでした。コミュニストたちがずかずかと私の家に入ってきて、持ち物を手あたりしだい持ち去りました。一族の親しい人たちも何人か殺されて、降ってわいたような惨事と恐れと絶望でいっぱいの毎日でした。だれにとっても、無意味な強制された生活は知らず知らずのうちに重荷になっていました。希望も夢も皆無でした。

私が福音のことを初めて聞いたときは、若者から老人までみんながそのような状態でした。めちゃめちゃに壊された家と銃声の中で、空腹のあまり大事な霊的な飢えにも気づかないときに、将来のことを考えようとする私たちのことを想像してみて下さい。私たちには、人生の意義を発見することが必要でした。そのようなときに、モルモンの宣教師が親切な若い軍人といっしょにやってきて、人生は報いてあまりある貴重なものであることを教えてくれたのでした。

私たちは永遠の生命の価値を知りました。福音を理解し、受け入れた人には平安と喜びがあることも知りました。悲惨な別れ方をした愛する人たちと、いつか主のみ前でまた会えることも知りました。私たちはそのようにして、幸せな永遠に続く家族になれるのです。あのとき、この回復された教えをだれよりも必要としていたのは韓国人だったと思いませんか。」

2名の宣教師が初めて日本から韓国にやってきたのは、1956年4月であった。後に韓国担当の十二使徒地区代表となった、当時は東京在住のポール・C・アンドラス伝道部長から派遣された宣教師であった。最初の宣教師が赴任したとき、モルモンの軍人によって改宗した64名の教会員が彼らを出迎えた。

韓国初の改宗者たちは、金髪碧眼の外国人宣教師から聞いた教えに、非常な関心を抱いた。宣教師は家族の一致や系図や死者と生者のための神殿事業や純潔の律法について話をした。宣教師たちが説明した神の概念は、韓国人がすでに知っていた概念と非常に類似していた。

末日聖徒イエス・キリスト教会の福音の教えが、韓国人にあのように受け入れられやすいのはなぜだろうか。ひとつ、単純な答えがある。教えられる原則が目新しいものではなく、従来からの韓国人のいろいろな信条を豊かにするものだからである。

たとえば、1909年創立の韓国に普及している大宗教という宗教は、キリスト教によく似た神の概念を持っている。多くの神々がいるが、至高の栄えある神がひとりあると教えるのである。その子（檀君）は仲保者として働き、民を助ける霊的な存在である。

韓国民はだれも純潔の律法を非常に尊んできた。不道徳の恥に甘んじるよりはむしろ死を選んだ人も多い。

韓国人は代々先祖を敬ってきた。家柄の良い家庭には系図が伝わっている。先祖崇拝を深く尊ぶ韓国人は、先祖(お

よびあらゆる死者たち）が系図の働きを通して救われ得ると教える回復された福音の教えを、大きな関心をもって見つめた。

韓仁相伝道部長は語る。「韓国放送局に招かれて私たちの宗教について話をしたことがあります。そのときに系図活動の話もしました。それが大きな反響を呼んで、そのあと3回もラジオで教会の話をすることになったのです。私たち韓国の教会員は、先祖たちが主の目的のために系図を保存するように主から教えられたと、強く感じています。

韓国ソウルステーキ部の高等評議員の金山（キム・サン）兄弟は、70代も系図を調べ上げました。目下、聖書に出てくる系図との関連づけにもっぱらの関心を注いでおられます。初期の改宗者の金道弼（キム・ドウ・ピル）姉妹は体が弱く高齢にもかかわらず、40代も系図を調べておられます。こうしたことができるのも、家系の記録の保存が韓国で一般に行なわれているためだと思います。」

家族が格別に大切なものであることは世界各国どこも同じだが、とりわけ韓国ではそうである。例えば、伝統に従った家は大家族で、2世代、3世代が同居することも珍しくない。西欧文化の影響でこの習慣も現在は急激に変わりつつあるが、家族のつながりはいまだに強固である。そのため、教会の家庭の夕べのプログラムは、韓国人の心に強く訴えるのである。

韓国人の旺盛な知識欲は、長く豊かな伝統の所産である。今日では、この国の教会員の教育水準は世界的に高いレベルにある。韓国人は、「人は無智にして救わるること不可能なり」（教義と聖約131：6）という言葉を真剣に受けとめている。彼らは回復された福音の中に、正しい探求の成就を見出しているのである。

スペンサー・W・キンボール大管長は、1968年2月27日のソウル訪問の後の日記に次のように記している。「韓国人はどん欲なまでの知識欲を持ち、多くの者が学位を持ち、何人かは博士号を持つことを知った。みだしなみが良く、魅力的な人々である。」

韓国人初の改宗者金浩植博士は、秀逸を求める韓国人の一典型である。彼の友人があるとき彼を評して次のように言った。「彼の正しい影響と神に対する素朴な信仰は、韓国の人々にとって大きな光でした。」

1956年に宣教師が韓国に来たとき、彼らを助けたのが新韓国地方部長の金浩植博士であった。彼は、前年8月に十二使徒会会長ジョセフ・フィールディング・スミス長老が、戦禍生々しいソウルを見下ろす丘の上に立って韓国をイエス・キリストの福音伝道の地に奉献した際に、任命を受けていたのである。その訪問の以前には、1954年、十二使徒のハロルド・B・リー長老が視察に訪れていた。この8月、スペンサー・W・キンボール長老が、この神権時代にあって初めてアジア大陸での集会を管理したとき、その場所が20年前に「朝なぎの国」が奉献されたあの丘から遠くない所だったことも単なる偶然以上のことであろう。

3年の間、当時韓国の教育次官をしていた金地方部長は韓国の宣教師を指導していた。福音を分かち与える精神はあまねく広まるものである。1951年、戦火の激しいさなかに、彼は合衆国のコーネル大学大学院の親しい学生によって改宗した。すでに韓国政界にあって重要な地位を占めていた45歳の金地方部長は、1951年に博士号を受けた。しかしそれよりも大切なことは、その年に、予言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが122年前にバプテスマを受けたサスケハナ川でバプテスマを受けたことである。彼は教会に加入した韓国の知名人第一号となり、戦時中に韓国に帰り、政府の要職についた。1952年8月には、ふたりの子息がアメリカ軍人の手で他の数名と共に初めてバプテスマを受けた。金地方部長は1959年に死去するまで、他の人々が福音を受け入れるための道を備えていた。今日でも、彼は依然としてアジアに類を見ない卓抜した末日聖徒の政治家である。

金兄弟の政界における地位は非常に重要なものではあったが、彼は教会の責任をそれよりも重く見ていた。ある日曜日の朝、彼が日曜学校のクラスで教えていたときに、李承晩大統領が秘書に私用の車を使わせて、重要な話合いがあるので金兄弟を迎えに行かせた。

秘書は日曜学校で教えている金兄弟を見つけて、すぐに大統領のところへ来るように伝えたが、金兄弟はレッスンを教え終るまで行けないと返事をした。やがて大統領に会った彼は遅刻をきつくとがめられた。すると金兄弟は大統領やいならぶ人々に、日曜学校教師という責任は大切なので、どうしてもレッスンは終りまで教えなければならなかったと説明した。それを聞いた大統領は金兄弟にとって教会がいかに大切であるかを知り、「見上げたものです！」と言ったのである。

1962年、韓国伝道部がゲイル・E・カー兄弟を初代伝道部長として発足した。1961年5月の十二使徒評議員会ゴードン・B・ヒンクレー長老の歴史的訪問に続いての発足であった。

この伝道部設立以来、韓国の教会はめざましい発展を遂げた。バプテスマは増えて、1974年だけでも900名以上にのぼる。家族の教会加入数も年々多くなっている。家族を対象とする教会プログラムや死んだ肉親のための系図活動は、家族が何よりも大切にされるこの国の人々によく受け入れられている。

地域総大会を機に大勢の教会幹部の訪問を受けて、プログラムも教会員数も、ますます増大し続けるこの国に、1967年4月にソウルを訪れたときのヒュー・B・ブラウン副管長の言葉は、今にも成就しようとしている。「幾万の民がこの国でイエス・キリストの教会に加わり、その原則に従うことによって福音の恵みを受けるときが来るであろう。」

国際機関誌はこの記事の執筆にあたり、李虎男氏および韓仁相氏の協力を衷心より感謝するものである。

バヤニハンの島　フィリピン

フィリピン共和国は変化に富んだ魅惑の国である。地理上、この国は熱帯に属する7,107の島々からなり、北は台湾から南はマラヤ付近まで伸びて、その距離は1,600キロに及んでいる。国土の大部分は活発な火山地帯に属しており、およそ半数の島々には名前がついていない。またほかにも、この火山活動によって隆起、水没を繰返している小島が数多くある。典型的な熱帯地方に位置する大きな島々はうっそうとした密林に覆われており、高くそびえる山々と共に人跡未踏の地が数多く残されている。

人々の心を捕える多様性は、フィリピンの地形のみならず人々の中にも見出される。フィリピン人は，中国人、アメリカ人、インド人、スペイン人、あるいは日本人を祖先とするものと、マレー人を基調としたこれら全部の人種が入り混ったものであるとも考えられている。フィリピン人はカトリック、プロテスタント、イスラム教、偶像礼拝のいずれかを信じており、言語は主要言語が8つ、地方語をすべて合わせるとその数は、90にも昇る。しかし、東洋文化と西洋文化の入り混ったこの国に社会的な緊張感は全くなく、特徴と言えばバヤニハン（共同作業）という民族特有の慣習が見られるのみである。

このバヤニハンという慣習は教会の発展に大きな役割を果たしてきた。1961年、ゴードン・B・ヒンクレー長老はフィリピンを福音伝道の地として再度奉献したとき，このように述べている。「主の恵みがこの国の人々にあり、彼らが島を訪れる人々を手厚くもてなし、親切で慈悲深くあらんことを、また多くの人が、このメッセージを受け入れ、恵みをたまわんことを願い奉る。」

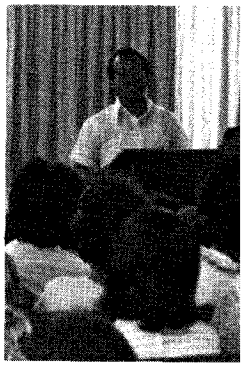
このような協力的な人々の中にあって、ヒンクレー長老の予言の言葉は成就されつつある。この国で伝道した帰還宣教師は、人々から玄関払いを受けたことは一度もなかったとたびたび報告している。たとえ見ず知らずの家族であっても、宣教師を招き入れ、食卓を共にしようとするのである。ビクトリアスで伝道を開始するため長老たちが派遣されたときも、四方八方から人人が集まってきたのであった。最近、本部から遠く離れたバクタワクの町からマニラにやって来たひとりの支部長は伝道部長に、日曜学校に35名の求道者が集ったと報告している。

フィリピンが南部極東伝道部から分かれて8年を経ないうちに、教会はおよそ2万人の聖徒を擁するまでに発展し、ひとつのステーキ部とふたつの伝道部に分離された。この驚くべき発展は、教会員がその心温まるフィリピンの慣習の中で宣教師たちと協力した結果得られたものである。

ある帰還宣教師は、同僚と共に英語をわずか10語位しか話すことができないメアリーという名のお手伝いさんに教えたことを次のように報告しているメアリーは集会の雰囲気が好きだったので、そこで何の話がされているのかわからなかったにもかかわらず、自分が仕えている家の家族と共に集会に出席した。しかし、彼女は宣教師とのレッスンは、言葉がわからないので受けようとしなかった。そこで愛に満ち、援助の手を惜しまないその家族の人たちは、彼女のために宣教師の言葉を一語一語通訳したのである。メアリーはこの友人たちの助けと辞書のお陰でモルモン経を読み始めたが、わずか1ページを読み進むのに1日がかりのときもあった。バプテスマを受けてからも、彼女は「奇しきみわざ」や「基督イエス」を英文で読んだ。

バヤニハンの精神は特に家族の中に強く表われている。親密な家族の一致は、教会内の絆を非常に強いものにしている。また、家庭の夕べのアプローチを基本にした新しい伝道プログラムは、フィリピンにおいて大変な成功を収めている。ある地域では、家庭の夕べに友人を招き、フルタイム宣教師と一緒になって伝道した結果40名以上がバプテスマを受けたという。

フィリピン人は福音を耳にすると、自分の親戚にもまた福音を分かち合い



たいと望む。ホセ・ズルエタの場合も甥がモルモンについて話しているのを耳にして、調べにやって来た。きまり悪そうであったが真剣に、そして笑みを浮かべながら。5週間後、彼は家族と共にバプテスマを受けた。次の朝、彼は長老たちを訪れ、すばらしい経験をこう語った。

「心の中ではこの教会が真実であるとわかっていました。でも、私はこれまで経験したことのない、もっと強い祈りの答えが欲しいと思いました。私はそれまで以上に熱心に祈り、私の行なってきたことが主の目にかなうものであることを示して下さるように願いました。しかし何の答えもありませんでした。私はすっかり落胆し、悲しみに打ちひしがれて床に就きました。」

眠りの中で、彼は白い衣をまとったひとりの人が彼の名前を呼ぶのを見た。彼が返事をすると、その人は彼を指さし、こう言った。「ホセ、ベッドから起きなさい。そしてひざまずき、主に宣教師を遣わして下さったことを感謝しなさい。」

このことがあってからズルエタ兄弟は宣教師のところに行き、自分の見た夢が神からのものであるかどうか尋ねた。

「あなたは夢を見てからどのように思いましたか。」宣教師はたずねた。

ズルエタ兄弟は目に涙を一杯浮かべ、みたまに圧倒されたような気がしましたと答えた。「燃えるような思いでした。その夜、神と教会に対する私の愛は祈りを通して何度となく天に昇って行きました。」

バヤニハンの精神はまた、1973年、マニラに組織された新しいステーキ部の中にもはっきりと見られる。ステーキ部の責任を遂行する指導者が各支部から召されたとき、支部の会員たちはその分を自分たちで満たさなければならなかった。その模様を観察していたひとりの人は、彼らの協力をこう語っている。「指導者たちは言っていました。『彼女はとてもすばらしいプライマリーの会長です。どちらの支部から移ってこられたのですか。』実際には、彼女はずっとその支部にいたのです。ただ、先任のプライマリー会長がステーキ部の会長に召されるまで彼女の力が発揮される場がなかっただけのことなのです。

セミナリーとインスティテュートのプログラムは、生徒と教師がよく助け合って福音を分かち合っている顕著な例である。4年前、100人の生徒と9人の教師で始まったこのプログラムは、今や全国で2千人を超える生徒と100人以上の教師を擁するまでになっている。フィリピン・マニラステーキ部長のアウグスト・A・リムは、全時間をセミナリーで教えることができるよう鉱山会社の弁護士としての職を一時離れた。彼はこのプログラムが若人の証を強め、彼らを宣教師として備える上で大きな成果をあげていることに励ましを得ている。

それらの宣教師のひとりに、地元から宣教師をというスペンサー・W・キンボール大管長の呼びかけに応じた、フィリピン生まれのレナルド・サンチェス長老がいる。彼はシラングに転任したとき、4人のアメリカ人宣教師と一緒に伝道することになった。このアメリカ人宣教師たちは過去5カ月間、熱心に主の業に働いてきたが、まだひとりの改宗者も出していなかった。心から熱意をもち、その地の慣習に通じたサンチェス長老は転任して最初の月に10人の人に教え、バプテスマを施し、その1カ月後にはさらに8人にバプテスマを施したのである。

このような改宗談はこの国の特色である。というのは、福音を求め犠牲を払うフィリピンの人々を主が祝福しておられるからである。現在、フィリピン・セブシティー伝道部の第一副伝道部長として奉仕しているセニン・J・ピネダ兄弟の場合にもそのことが言える。

ある日のこと、奥さんと一緒にサンフェルナンドを車で通っていたとき、彼はふたりのアメリカ人の若者を見かけた。彼は車を止めるとふたりに宣教師ですかと尋ね、それから自分の家に招待したのであった。「ふたりはあやうく書物を落とすところでした。」当時を思い出してこう語る。とにかく、最初のレッスンに知恵の言葉と什分の一のことが出てきた。そこでピネダ兄弟は宣教師の話をさえ切ると隣の部屋に行って、奥さんとふたりで貯えてきたものを什分の一として差し出した。

ピネダ家族の話によると、彼らは浸礼によるバプテスマを施し、灌油と按手によって病人を癒し、また日曜学校や青少年児童のための活動を行なうプロテスタントの教会で什分の一の教えを学んでいたのである。

しかしながら、宣教師に会うまでの2カ月間、ピネダ家族は教会に行っていなかった。ピネダ兄弟は家族が寝静まってから毎夜、主に真実の教会に導いて下さるようにと祈っていた。「私がどこで真実の教会という言葉を知ったのか今でもわからないのです。」そう彼は言う。

ピネダ兄弟が福音を受け入れることは容易だった。しかし知恵の言葉はとても克服し難いように思えた。1日平均6杯のコーヒーを飲み、タバコを3箱も吸っていたからである。しかし、最初のレッスンで宣教師が知恵の言葉について説明してくれてから、「私はひざまずいて祈りました。別に誇張して言っているのではありません。本当にひざまずいたと同じようにたやすく、きっぱりやめました。」

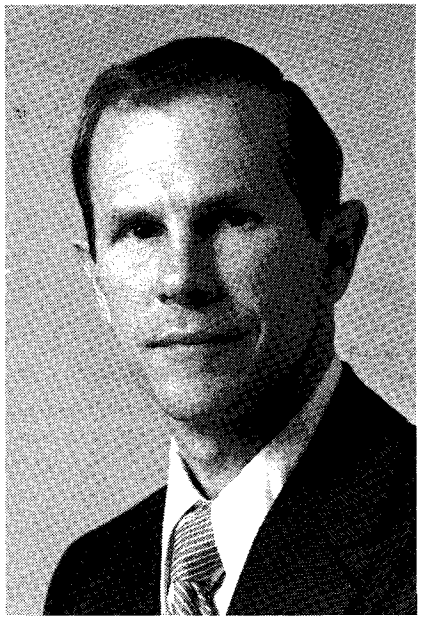
2回目のレッスンを受ける前に、彼は奥さんの願いに大いに逆らってバプテスマを受けた。しかし1週間後には彼女もバプテスマを受け、子供たちもそれに従った。

本当の試練が来たのはそれからであった。彼が地方部長会の一員だったとき、フィリピンで最大のタバコ会社のひとつから仕事の申し出があったのである。営業担当の重役が80キロの旅をして彼に面会に来、ピネダ兄弟が答えを得ようと教会にいた間ずっと待っていたが、ピネダ兄弟はその仕事を断わった。数カ月して、営業担当の重役は他にだれも雇わず再び彼に仕事を勧めにきた。ピネダ兄弟にとって、そのときの誘惑は以前にも増して強いものだった。ひとりの娘は大学に入ったばかりの上、他の子供たちも皆学校に行っていたからである。ついにピネダ兄弟はその申し出を受けることにした。

「私たちは経済的には何の問題もありませんでした。でも幸福ではありませんでした。少しのことですぐカッとなるようになってしまったのです」と彼は述懐している。ピネダ兄弟は家族の仕事に犠牲……金銭に恵まれないことや車をあきらめること、学校教育を受けられないこと、友人や親戚の人たちから侮辱されることなどの犠牲が伴うことを知った。しかし「福音に対する証を失わない」ために、ピネダ兄弟は辞職した。そして家族全員が協力して、新たな経済状態の立て直しを図って行った。子供たちは学業を続けられたものの、予想してたとおり非常に困難な生活であった。「でも私は全然後悔しませんでした。そして家族も私も、会社を辞めたことをとても喜び感謝しました。」

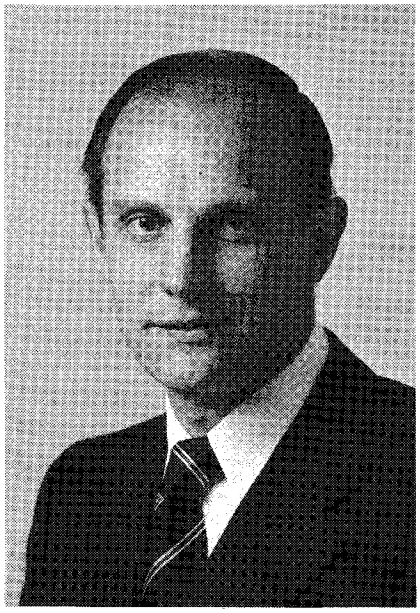
このような人々の協力を通じて、フィリピンにおける教会は発展している。しかし、フィリピン・セブシティー伝道部長のカール・D・ジョーンズはそれでもなおへりくだり、宣教師たちに「私たちはまだわずかの畑を刈り入れたにすぎません。まさに教義と聖約第4章4節の約束にあるように、早白くして刈り入れを待つ畑はたくさん残されているのです」と語るのである。

七十人第一定員会組織さる!!

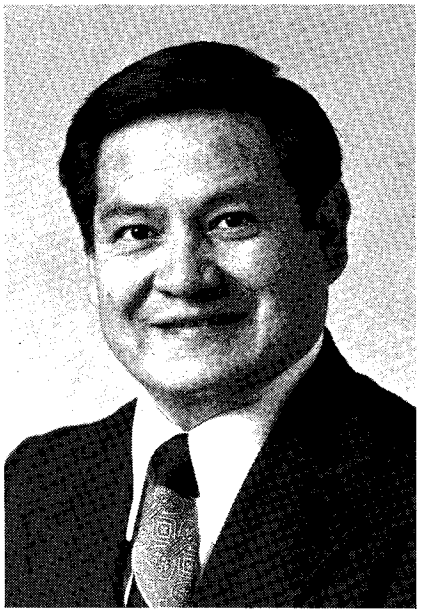


ジーン・R・クック

ウィリアム・R・ブラッドフォード



チャールズ・A・ディディア



ジョージ・P・リー

去る10月3日、第145回半期総大会の開会にあたり、スペンサー・W・キンボール大管長は七十人第一定員会を組織することを発表した。これは歴史的な出来事である。

また同時に、七十人最高評議員会会員として、これまで七十人最高評議員会幹部書記の任にあったジーン・R・クック長老が任命されたことが発表された。この任命は、去る6月25日のミルトン・R・ハンター長老の死去によって生じた空席を補充するためのものである。七十人第一定員会会員として新たに教会幹部に召された人々は次の通りである。これまで十二使徒会地区代表の任にあったチャールズ・A・ディディア、チリ・サンチャゴ伝道部の伝道部長を務めていたウィリアム・R・ブラッドフォード、それにアリゾナホルブルック伝道部伝道部長のジョージ・パトリック・リーである。

この七十人第一定員会は七十人最高評議員会から管理を受ける。また第一定員会会員の間には先任順位はない。

七十人第一定員会は、ゆくゆくは70名の会員により構成されることになる。七十人最高評議員会会員も、その70名の中に含まれる。

七十人定員会は、1835年2月28日に組織され、当時は第一定員会と呼ばれた。その定員会は、7人の会長の下に機能を果たしていたが、定員会会員は教会幹部とはみなされていなかった。

ジョセフ・スミスの死後、この第一定員会の63名の会員を会長として、9つの七十人定員会が組織された。そして創設当時、第一定員会の会長を務めていた7人は、9つの定員会を管理した。この7人の会長が七十人最高評議員会の始まりである。

七十人最高評議員会の7名の会長は、伝道役員会においてその任務を果たし、また回復されたイエス・キリストの福音を全世界に宣べ伝えるという、特別な伝道の業のために召されている。

七十人最高評議員会は、今後七十人第一定員会会員と共に、大管長会並びに十二使徒会の管理のもと、全世界のステーキ部や伝道部において伝道事業がより効果的に行われるように働く。

また同時に、教会幹部としての責任をも果たすことになる。

今年は新たに20の伝道部が組織され、合計133となった。これは教会歴史始まって以来の伝道事業の躍進と言える。

しかしながら、キンボール大管長はさらに続けて宣教師の数を増やし、またその力を強めていく必要があることを指摘した。大管長は、現在門戸を閉ざしている国々にも、宣教師が足を踏み入れる日が来ることを待ち望んでいる。

新たに七十人最高評議員会会員に任命されたジーン・R・クック長老は、クラレンス・H・クック及びマール・T・クックを両親として、1941年9月1日ユタ州リーハイに生まれた。そして1963年11月29日、アリゾナ州ウインスローに住んでいたジャニール・シュリンクとアリゾナ州メサ神殿で結婚し、現在4人の子供に恵まれている。

クック長老は、1972年以来十二使徒会地区代表として働いてきた。最近ではアルゼンチン・コルドバ伝道部、アルゼンチンのトゥクマン地区、そしてインディアナ州インディアナポリス及びオハイオ州コロンブス伝道部を担当してきた。

結婚する前に、彼は宣教師としてウルグアイ・パラグアイ伝道部で働いた。伝道後の13年間は、3つのステーキ部伝道部でステーキ部伝道部長としての任務を果たし、またステーキ部七十人定員会の7名の会長のひとりとなった。

そのほかにも、YMMIAにおいてダンスやスピーチの教師、YMMIA副会長などを歴任し、また神権会や補助組織の教師、それにワード部書記補助などをも務めている。

また教会で使われているレッスンテキストの著作に携わったこともある。

メサの公立高校を卒業した彼は、アリゾナ州立大学に進学、1965年学士号を受け、1966年商業経営を専攻して修士号を取得した。後に公認生命保険業者の資格を得、ミリオンダラーラウンドテーブルの一員となった。

ウイリアム・ロウセル・ブラッドフォードは、1933年10月25日、ユタ州スプリングビルの生まれで、ロウセル・W及びメアリー・ワドップス・ブラッドフォードを両親に持つ。

1955年6月22日ソルトレーク神殿において、ユタ州メイプルトン出身のメアリー・アン・バードと結婚、ふたりの間には6人の子供がいる。

ブラッドフォード長老は、かつて伝道部長としてハワイ州ライエのテンプルビュウロウ伝道部を管理した。父親に伴なってハワイに移住、後に日本伝道部で宣教師として働いた。

ブラッドフォード長老は、マサチューセッツ州フォートデブンズで、軍人のグループリーダーとして働き、またテキサス州では、地方部長、長老定員会会長、伝道部補助組織役員、マカーレン支部支部長など、数多くの職を歴任した。

そして本年7月からこの職に召されるまで、チリ・サンチャゴ伝道部で伝道部長として働いてきた。

ブラッドフォード長老は、伝道部長として召しを受ける以前、テキサス州マカレーンにあるインターナショナルフルーツグロワーズ・アンド・シッパーズ社の社長であった。この会社はメキシコの柑橘類や、熱帯果実を栽培収穫し、合衆国やカナダに販売配送することを業務とする会社である。

彼は、ユタ州スプリンビルの高校を卒業後、ブリガム・ヤング大学に学んだ。

チャールズ・A・ディディアは、1935年10月5日、ベルギーのイクセルスでアンドレー及び、ガブリエル・コルパエルトを両親として生まれ、1957年11月24日、この教会に改宗しバプテスマを受けた。

彼の妻は、リエージュ出身のルシー・ロンドメスで、15歳のときに教会に改宗した。ディディア兄弟姉妹は、1961年10月14日に結婚し、現在ふたりの子供がいる。

ディディア長老は、西ドイツのフランクフルトにある教会の翻訳配送センターのヨーロッパマネージャーを務めている。

またフランス・スイス伝道部伝道部長、日曜学校教師、ベルギーのリェージュ支部支部長などを歴任した。

出身大学はリェージュ大学、そこで経済学を専攻し学士号を得た。卒業後は、ベルギー空軍士官として働いた。

またベルギー領コンゴとベルギーとの通商関係についての研究論文も書いている。

この職に召される以前十二使徒会地区代表であった彼は、フランス地区、フランス・ベルギー地区、フランス・パリ伝道部、及びベルギー・ブリュッセル伝道部を担当した。

ジョージ・パトリック・リーは、1943年3月23日、コロラド州トワオクでピート及びマエ・K・レッドウーマン・リーを両親として生まれた。

リー長老は1967年12月13日、ソルトレーク神殿でオクラホマ州出身のコマンチインディアン、キャサリン・ヘティッチと結婚し、現在3人の子供に恵まれている。

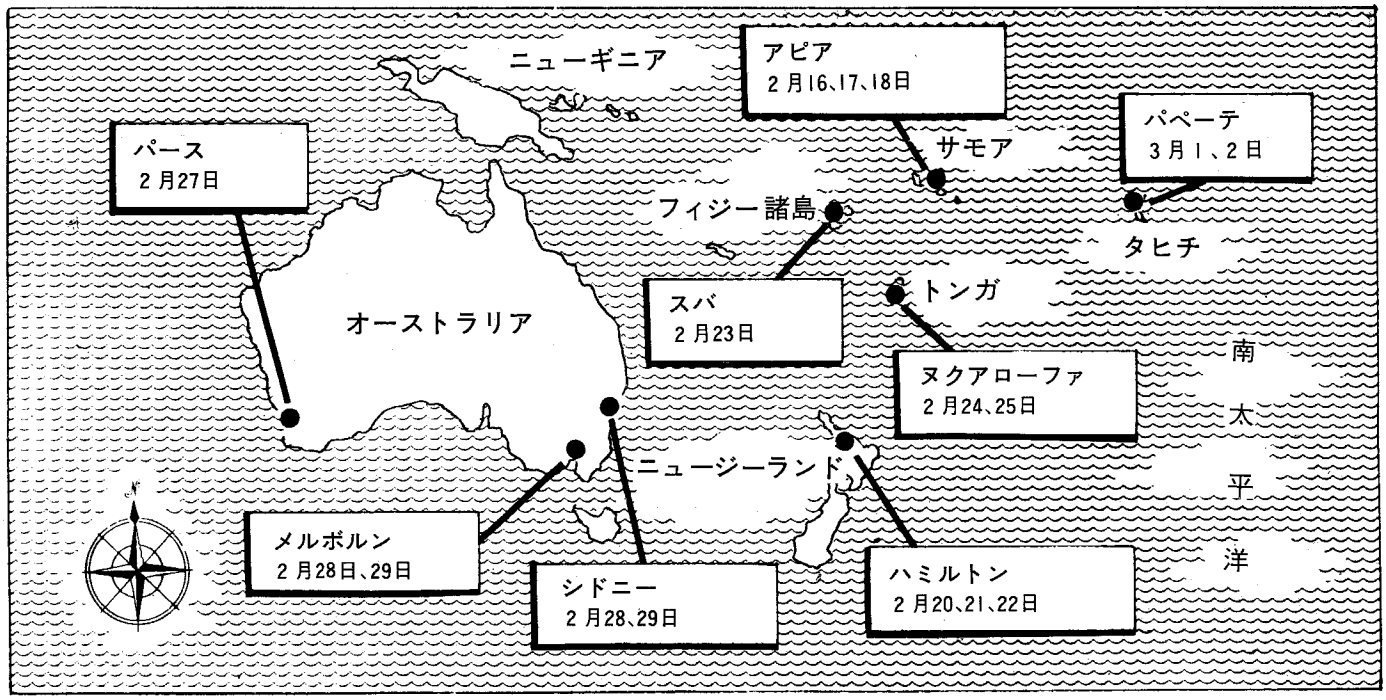
リー姉妹はブリガム・ヤング大学を卒業、またリー長老はかつて、アリゾナ北部にあるナバホ保留地の2年制大学であるグラナド大学の学長を務めた。かつては長老派教会の寄宿学校であったこの大学で、インディアンとしてこの職に任ぜられたのは彼が初めてである。それ以前は副学長、学生部長、インディアン研究主任などを務めた。

リー長老は、1968年にブリガム・ヤング大学で学士号を得、修士号は1970年にユタ州立大学で取得、そして1975年、ブリガム・ヤング大学で博士号を得た。

末日聖徒イエス・キリスト教会のインディアン学生紹介制度に参加した彼はユタ州の公立高校に進学し、その間オーレムに住むグレン・L・ハーカー夫妻のもとで生活した。これは、彼が住んでいたナバホ保留地の近くでは適当な教育機関がなかったからである。

彼は、数多くの奨学金や賞を受け、「アメリカの傑出した若人」のひとりとして知られるようになった。そしてホワイトハウス特別研究員として指名を受けたが、グラナド大学副学長の職を受けるため、それを辞退した。教会では、ニューメキシコ・アリゾナ伝道部の副伝道部長をも務めた。

来春、南太平洋地域にて
地域総大会を開催!!



キンボール大管長が言われた「教会のすべてのプログラムを全世界の人々にもたらす偉大にしてかつ新しい試み」の一環として、1976年2，3月にオーストラリア、ニュージーランドおよび南太平洋諸島の10万6千人以上の教会員のために、8ヵ所で地域総大会が開催されることになった。

大管長会はオーストラリアで3ヵ所、ニュージーランド、サモア、フィジー、トンガ、タヒチのそれぞれで1ヵ所地域総大会を開催すると発表した。これらすべての大会に教会幹部たちが出席する予定である。

大会の日程は次の通りである。

アピア（サモア）……2月16～18日（月～水）サモアの会員のために。活動とソーシャルプログラム、4つの一般大会、および特別グループ大会。会場は西サモア首都アピアの近くにある西サモアチャーチカレッジ。

ハミルトン（ニュージーランド）……2月20～22日（金～日）ニュージーランドの会員のために。活動とソーシャルプログラム、4つの一般大会、および特別グループ大会。会場はハミルトン郊外テンプル・ビューにあるチャーチカレッジ。

スバ（フィジー）……2月23日（月）一般大会が月曜の夕べに、スバの市民文化会館で開催される予定。

ヌクアローファ（トンガ）……2月24，25日（火、水）トンガの会員のために。4つの一般大会、活動とソーシャルプログラムの夕べ。会場は教会のリアホナ高校。

パース（オーストラリア）……2月27日（金）パースのステーキ部、伝道部の会員のために。一般大会が金曜日の午前にオーストラリア・パースステーキ部センターで開催される予定。

またオーストラリアでは、このほかにメルボルンとシドニーにおいて、2月28，29（土、日）の両日、同時に大会が開催される。メルボルンでは4つの一般大会、特別グループ大会がフェスティバルホールで行なわれる予定。対象はオーストラリア・アデレード、オーストラリア・メルボルン・フェアフィールド、オーストラリア・メルボルン・ムーラビンの各ステーキ部、およびオーストラリア・アデレード、オーストラリア・メルボルンの各伝道部である。

シドニーでも同じ集会が、オーストラリア・ブリスベーン、オーストラリア・パラマタ、オーストラリア・シドニー・グリニッジ、オーストラリア・シドニー・サウスの各ステーキ部、およびオーストラリア・ブリスベーン、オーストラリア・シドニーの各伝道部を対象に開催される予定である。

パペーテ（タヒチ）……3月1，2日（火、水）4つの一般大会および活動とソーシャルプログラムが、教会のパペーテ小学校で開催される予定。

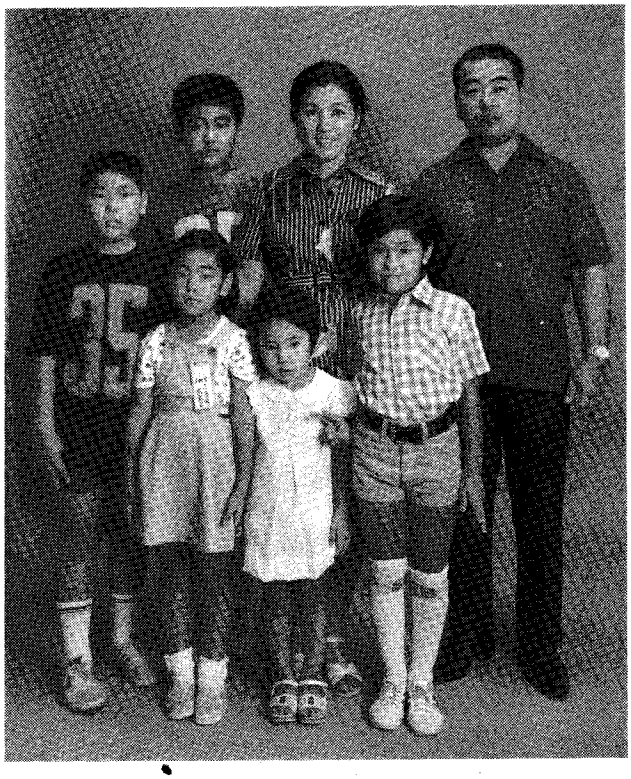
現在の教会員数は、概算でニュージーランド3万4千、オーストラリア3万1千、サモア2万、トンガ1万4千、フィジー2千5百、フランス領ポリネシア5千2百である。

主の愛と
クイズ番組

日本福岡伝道部　那覇支部
幸　地　好　子

「日本の地で地域総大会を開いてくださいましてほんとうにありがとうございました。」と、一言でも大管長会の方々にお礼申し上げたい気持です。私の家族は、非教会員の主人と主人の母、そして私と5人の子供たちからなる8人家族です。主人は、私が地域総大会に出席することに賛成し、子供はひとりだけ連れていくように申しました。11才の長男は、バプテスマを受けていましたが、10才の次男がまだバプテスマも受けず、私を心配させていました。次男は日頃から、お父ちゃんも教会へ行かないから、僕も行かないと、一向に心を教会へむけませんでした。ですから大会には、次男を連れていくことにして、この機会にバプテスマを受けさせようと決めました。でも長男をさしおいて次男を連れていくことに私の気持はすっきりしませんでした。

また、このすばらしい機会をぜひ長男にも与えたいとの望みは強くなるばかりでした。長男にあなたがもし、ほんとうに行きたいなら踊りのエイサーを練習していた方がいいよ、神様はほんとうにいらっしゃるのだから。私たちの求めるのが正しいものならきっと、与えてくださるからと申しました。でも長男は、私が2，3回主人に同じことを頼んで叱られたのをみてましたので、どうせ僕は行けないでしょうと、あきらめているようでした。そんなとき、テレビ番組の『ＱアンドＱ夏休み子供大会』に沖縄からも出場者を募集していましたので長男が申し込み、テストを受けに行きました。二百余名の中から10名の中に選ばれました。それから3人の出場者が決まる訳です。もし決まったら出演は8月中旬頃とのことでしたので、私はもし当選したらどうにか大会にも参加できるんじゃないかとの望みをもち、断食し祈りました。長男と共に一生懸命祈りました。また、子供たちも集めて特別な祈りを捧げ、とっても嬉しい気持になり自然に讃美歌を口ずさみました。でも、翌日落選したことを知らされました。そのときの私は、この望みはかなえていただけると信じていただけに。とってもがっかりしました。



大会の日が近づくにつれ、長男の大会に参加したいとの望みは強くなるばかりでした。私は息子にあなたは行けるかも知れない、とたびたび申していました。また今度は小川宏ショーで母子のクイズ番組に長男が申し込みました。しかし、しばらくなんの連絡もありませんでしたので家族みんな今度もだめだと話合っていました。

8月7日に団体出発をひかえた三日前の朝、おばあちゃんに子供たちや家のことをお願いしました。非教会員のおばあちゃんは、そのとき、往復の飛行機代も自費だと私から聞くととても不機嫌になりました。それでも行ってきなさいと言ってくれましたが、私もとっても重い気持になりました。その日の午後突然、テレビ局から私たちの出演が決まり、母子の飛行機代もテレビ局が出して下さるという知らせを受けたときの喜びは口では表わすことができないほどでした。ほんとうに主の愛、主の助けを身近に感じました。おばあちゃんも孫がテレビに出るとのことで喜んでくれました。あとで知ったのですが、『ＱアンドＱ』の出演は19日でした。もしその番組に当選していましたら息子は大会に参加できませんでした。私たちの出ました『母子クイズ』は、大会初日の「楽しい夕べ」のありました朝の9時から10時半迄でした。もし1日でも先か、1日でもあとでしたら出演できませんでした。主の導きにほんとうに感謝致しております。次男も今、バプテスマを受ける準備をして、安息日には教会へ行っています。「求めよ、さらば与えられん。さがせ、そうすれば見い出すであろう」との主の約束に深く感謝致しております。

聖徒の道

1975年11月20日発行（毎月1回20日発行）　第19巻第11号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可